

平成 25 年 7 月 1 日

JEX の『ジャパン・セックス・サーベイ』からみる

日本人の性行動の実態

第 4 稿（修正版）

リプロ・ヘルス情報センター

菅 睦雄



## 目次

---

---

はじめに.....	6
I 章：性行動 ⇒ 男と女の違い ⇒ 既婚と未婚の違い.....	7
1. 性行動(Sexual behavior)とは .....	7
2. 『性』の三側面 .....	7
3. 性の初め .....	8
3-1. 初交年齢について .....	8
3-2. 初交年齢の世代間比較.....	8
4. 性体験は… .....	9
4-1. 男と女、どちらがその年代で性体験をもっている？.....	9
4-2. 既婚と未婚者ではセックスの意味が異なる.....	10
4-3. 未完成婚も少なからずいる .....	11
5. 最近 1 年間の性行動.....	12
5-1. 最近 1 年の間にセックスをしましたか？ .....	12
5-2. 未婚女性のセックス離れの意味するものは…？ .....	13
6. 性交頻度が語りかけてくるもの .....	14
6-1. セックスの頻度 .....	14
6-2. 30 歳以降の既婚者に多い『ルーティンセックス』 .....	14
6-3. 性成熟期女性と中高年女性の性 .....	15
8. 性行動の小括.....	16
第Ⅱ章：生殖の性（産む性・産めない性） .....	18
1. 妊娠・出産に備えての性 .....	18

1-1. 既婚女性は 80%が妊娠し、うち 95%は出産、中絶経験者は 34%.....	19
1-2. 未婚女性は 10%弱が妊娠をし、うち出産は 17%、中絶は 9 割弱.....	19
1-3. 婚前交渉の是非.....	20
1-4. 今や！自由恋愛時代.....	21
1-5. できちゃった婚とシングルマザーは増えている？.....	21
2. 社会調査が語る女性の立場.....	22
2-1. 晩婚化傾向の実態.....	22
2-2. 結婚があって離婚 ⇒ 結婚・離婚・再婚の推移.....	23
2-3. 初婚の年代別推移.....	23
2-4. 離婚及び再婚の年代別推移.....	24
3. 結婚は家庭、家族、社会形成の第一歩.....	24
3-1. 第一子出生時の母体年齢の推移.....	25
3-2. 女性には生殖年齢の限界がある！それは….....	25
3-3. 高齢出産にはリスクが伴う.....	27
4. 望まない妊娠を避けるために⇒人工妊娠中絶の問題.....	28
4-1. 妊娠中絶は激減してきている.....	28
4-2. 低用量ピルは、避妊の意識改革に大きく貢献した.....	29
5. 避妊の実際について.....	30
5-1. 避妊に対する意識、男と女で違いがある？.....	30
5-2. 未婚と既婚という女性の環境で避妊への意識が異なる？.....	31
5-3. 避妊法の実際.....	32
第Ⅲ章 複走する性.....	33

1. 複走する性 .....	33
1-1. 性的パートナーの数 .....	33
1-2. 複数のパートナーを持つ者の年代層は？ .....	34
1-3. 不倫関係は「どの程度起きている」のか！ .....	34
1-4. 性的パートナー数と性交頻度 .....	35
1-5. 不倫 ⇒ 人は誘惑に弱い生き物であった .....	35
2. 満たされない性 .....	38
2-1. MB を行ったことがあるのは、男 95%、女 60%強 .....	38
2-2. MB の開始時期は男性、思春期前期、女性思春期後期 .....	39
2-3. 最近 1 年間で MB 実施の有無 .....	39
2-4. マスターベーションの頻度 .....	40
2-5. 性交頻度と MB 頻度との関係 .....	41
2-6. MB の際にバイブを使用するの？ .....	41
第IV章. 豊かな性を求めて .....	42
1. セックスレス .....	42
1-1. セックスレスの実態 .....	42
1-2. 婚姻期間と関係があるのか？ .....	42
1-3. セックスレスの理由 .....	43
1-4. お産のあとがセックスレスの理由になっている？ .....	44
2. 性交痛の悩みは女性にとって深刻 .....	45
2-1. 性交痛をどれくらい的女性が訴えている？ .....	45
2-2. セックスに膣の潤いは不可欠 .....	46

2-3. セックスの痛みを相手に伝えているのか？.....	47
2-4. 性の営みは性交痛から解放されて豊かなものになる.....	48
3. 豊かな性を求めて .....	49
3-1. パートナーの性的満足度の自己評価.....	49
3-2. 満足いくセックスにするための工夫.....	50
4. 3～4割の女性がオーガズムを感じている.....	51
4-1. 女性のオーガズムは年齢に応じ、『とき』と『ところ』をかえている .....	51
4-2. 豊かな性の営みは実り多きもの（生殖の性） .....	52
4-3. オーガズムを感じた多くは妊娠を…！ .....	53
5. 高齢者の営む性 .....	54
5-1. 高齢者の性交頻度 .....	54
5-2. 高齢者の性：性交頻度とオーガズムとの関係 .....	55
5-3. 高齢女性の性：オーガズムと性交痛.....	56
5-4. 高齢者の性：性的満足はお互いに分かち合っている.....	56

## はじめに

2012年11月に一般社団法人日本家族計画協会家族計画研究センターがジェクス株式会社からの依頼を受けて『生活と意識に関する調査』と題し、個々人の日常的な性意識や性行動に関する調査が行われました。

現在の年齢から始まり、性別、婚姻関係、学歴、職業、就労状況等の基本情報

12項目と性交経験や現在の性交頻度、性的パートナーの数など42項目に亘って性意識や性行動に関する設問を設け、協会の北村邦夫医師の指導のもと医学的見地に立脚したものとして行われました。その集計解析結果を2013年1月に「『ジェクス』ジャパン・セックス・サーベイ」結果報告会が行われました。その結果の一部は、ジェクス株式会社のホームページ上の「JEX セックスサーベイ 2012」にて公開されております。

JEX社の“JAPAN SEX SURVEY”からみる

### 日本人の性行動の実態

JEX JAPAN SEX SURVEY 2012より

リプロ・ヘルス情報センター  
菅 睦雄

<http://www.jex-inc.co.jp/learn/index.html>

このジェクスセックス調査は、20歳から69歳までの男女を対象とし、インターワイヤード株式会社が提供するDIMS DRIVモニターを利用しインターネットリサーチを行ったものです。得られた回答者数は7,000名近くにも上る広範囲のもので、同様の調査は過去にも例がなく、今まで隠されていた日本人のセックスの実態が明らかにされることとなったと考えます。

リプロ・ヘルス情報センターは、本調査の解析の一翼を担うことができましたので、得られた結果に基づき『日本人の性行動の実態』と今日の晩婚化社会と少子高齢社会をもたらしてきた性行動とその影響について検討を加えてみたいと思います。

## I 章：性行動 ⇒ 男と女の違い ⇒ 既婚と未婚の違い

### 1. 性行動(SEXUAL BEHAVIOR)とは

性行動とは、『種族保存に寄与する情動行動の1つである。人間の性行動とは、性交の前後に行われる生殖行動と情動行動としての二面がある』と石濱淳美編著の「新編セクソロジー辞典」（メディカ出版；1994年）に記載されています。

また、情動(emotion)とは、『情緒ともいい、自己の身体的または心理的な存在（諸欲求、体面、面目、自尊心）が脅かされたと感じたとき（ある場合にはそれらが促進されたと感じたとき）、急激に起こる心理的および身体的な変化を云う』と同様（前出）に記載されています。

次に性交(coitus)です。性交は文字通り性が交わることで、男性の陰茎（ペニス）を女性の膣内に挿入し、膣内に射精することと先の辞典では述べております。法律上では射精をしなくても陰茎を膣内に挿入しただけでも性交として捉えています。また、coitus はラテン語ですが、《coito》の co は《together》、ito は《go to》で《going together》という意味のようです。まさに言い当てた言葉だと云えます。

### 2. 『性』の三側面

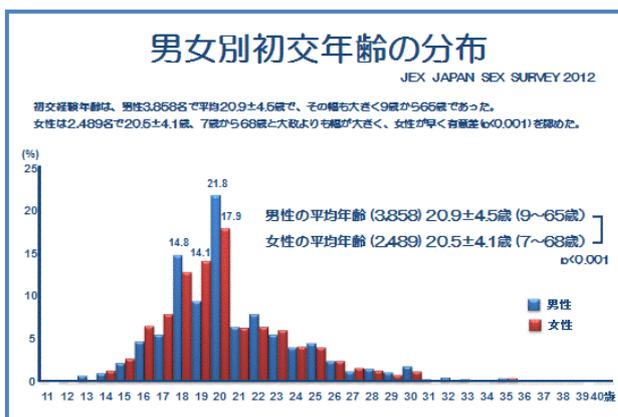


性の営みには3つの側面をもっています。男と女が裸になって営みあう行為です。お互いがより親密になり心の絆を深めあうといった『連帯の性』が一つ。お互いが結ばれるという喜びを分かち合う『快楽の性』が二つ目。この二つの頂点に立つのが『生殖の性』というものです。

愛の結実として、子を宿し家庭を築き上げ、次世代の社会を担うのです。これが人類のあゆんできた道なのです。

### 3. 性の初め

#### 3-1. 初交年齢について



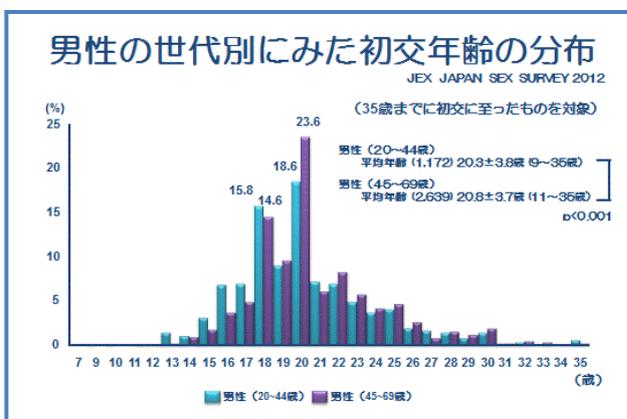
初めてセックス（性交）をするときのことですが、実際に何歳の時に始まっているのでしょうか？『ジャパン・セックス・サーベイ』からみることにします。

初交年齢の得られた回答は男性 3,858 名、女性 2,489 名の計 6,347 名です。初交開始年齢をみますと、男性で 20 歳(21.8%)、女性 20 歳(17.9%)

と最も多い結果が得られました。この平均年齢でみますと男性 20.9±4.5 歳(9~65 歳)、女性 20.5±4.1 歳 (7~68 歳) となり女性の方が早い結果となっています。統計学的にみて女性の方が早いことを示しています。

ここで一つ気になるのが高齢での初交者です。男性での最高齢者は 65 歳、女性は 68 歳とありました。そこで 45 歳以降の初交者をみますと男性 16 名 (0.4%) で初婚 10 名、離婚 4 名、未婚と再婚が各 1 名でした。女性は 6 名 (0.2%)、うち離婚 3 名、初婚、再婚、死別各 1 名という背景を持っていました。それぞれの事情があるにつけ考えさせられる一面もあるようです。

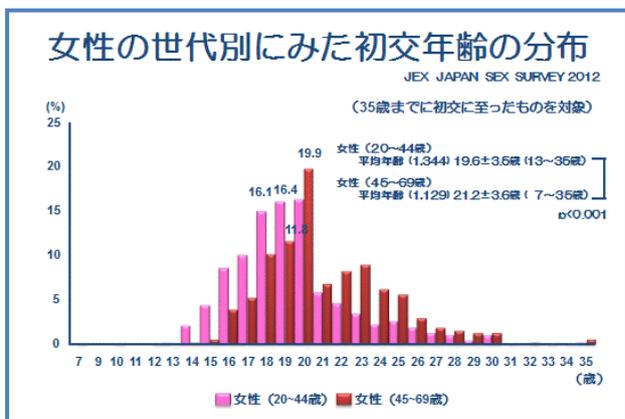
#### 3-2. 初交年齢の世代間比較



初交年齢で世代間に違いがあるのでしょうか？この点について確認してみました。20~44 歳までを性成熟期群、45~69 歳を中高年期群と 2 つに分けて 35 歳までに初交に至ったものを対象に比較検討してみました。

男性の性成熟期群 (20~44 歳) の初交年齢の割合をプロットしますとやはり 20 歳がピークで 18.6%、次が

19歳 15.8%でした。この初交平均年齢をみますと 20.3±3.8歳となりました。45～69歳の中高年群では20歳がピークで23.6%、平均年齢 20.8±3.7歳で性成熟期群の方に初交年齢が早くなっていることが統計学的にみても明らかとなりました。



女性をみますとその違いがより明らかとなっています。ピーク値は20歳で性成熟期群16.4%、中高年期群19.9%となっていますが、桃色の棒で示していますように性成熟期群が全体に左側に移動しています。平均年齢が若い方では19.6±3.5歳に対し21.2±3.6歳と1.5歳程初交年齢が早まっています。

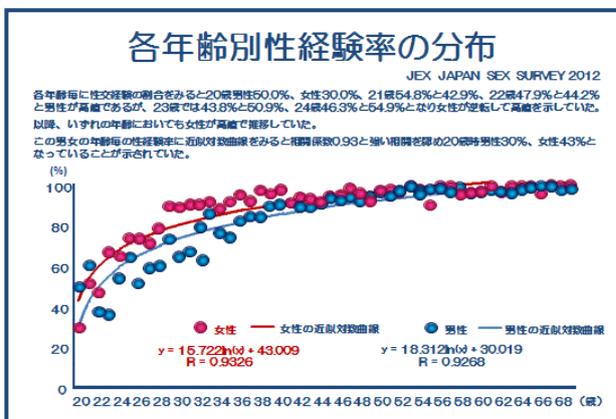
中高年期群の男性と女性の初交時平均年齢では男性が早く有意差を認めていたのですが、45歳未満の性成熟期女性では、男性を越えて初交年齢が早くなっていたのです。

#### 4. 性体験は…

##### 4-1. 男と女、どちらがその年代で性体験をもっている？

20歳から69歳の男女別に性経験もっている割合をみますと男性4,254名中3,858名(90.7%)、女性2,707名中2,489名(91.9%)となっていました。

それを各年齢でみますと20歳男性では20名中11名(50.0%)、女性20名中6名(30.0%)、21歳男性20名中12名(60.0%)、女性29名中15名(51.7%)と続



いていました。それを年齢毎にプロットしてみました。23歳以降をみますと女性の方(赤丸)が男性(青丸)よりも高い位置にプロットされています。40歳以降からは男性も高値となり90%以上で同じように推移しています。

この男女の年齢毎の性経験率に近似対数曲線を描いてみますと相関係数0.93と強い相関を認め20歳時の推定値

が男性 30%、女性 43%となっていました。すなわち 20 歳の男性では性経験者が 30%程に対し、女性 43%と推定されているのです。



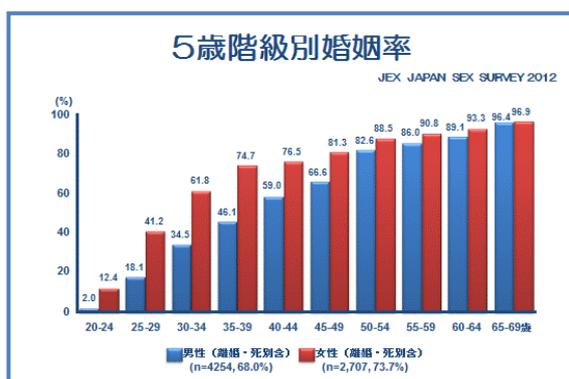
この性経験率を 5 歳階級毎に括って見たのが、次のグラフです。20 歳後半から 40 歳前半の男女を比べてみますと統計学的に女性が有意に高値と示されていました。

セックスの経験者は同じ年代で見ますと男性に比べ女性の方が多いという結果でした。20 歳前半では男性

46.3%に対し女性 54.9%、20 歳後半男性 62.4%、女性 78.2%、20 歳男性 298 名中 162 名 (54.4%)、女性 323 名中 217 名 (67.2%) と女性において性経験者が多く統計学的に有意差(p<0.01)を認めています。

この結果をみますと女性の方が性的行動は早い時期に活発化してきているのです。性行為という性の営みは、男と女が強い絆で結ばれ夫婦として営まれるものという考えが、今日の社会規範となっています。既婚者には性を介して家庭を築き上げるという使命が付与されています。女性が男性よりも早く結婚しています。既婚者は夫婦生活を持っており、性経験者が多くなります。でも結婚していない未婚の男女においても、『生殖の性』は、未だ至らないけどお互いが生涯の伴侶として確かめ合う性という準備期間としての役割もあります。

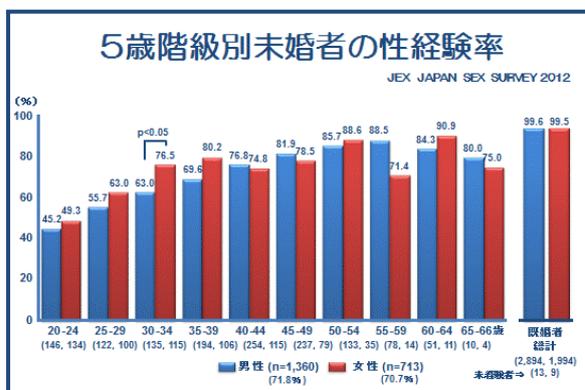
#### 4-2. 既婚と未婚者ではセックスの意味が異なる



ここでは婚姻関係にあるもの、あったものを除いた中での性経験をみてもする必要があります。

まず、5 歳階級別に婚姻率をみますと 20 歳前半では男性 2.0%、女性 12.4%、20 歳後半男性 18.1%、女性 41.2%とあります。2010 年の男性の平均初婚年齢が 30.5 歳、女性 28.8 歳ですから、厚労省の人口

動態調査の結果とも一致しています。同様に国勢調査の50歳時点での生涯未婚率（45歳から54歳の平均）男性20.1%、女性10.6%ともよく一致しています。



5歳階級毎の未婚者の性経験率をみますと、20歳前半男性45.2%、女性49.3%、20歳後半男性55.7%、女性63.0%と女性がやや高いですが、有意な差ではありません。しかし30歳前半では男性63.0%、女性76.5%と未婚女性の性経験者が急速に増えていました。30歳後半も

女性の性経験者が勝っていたのです。

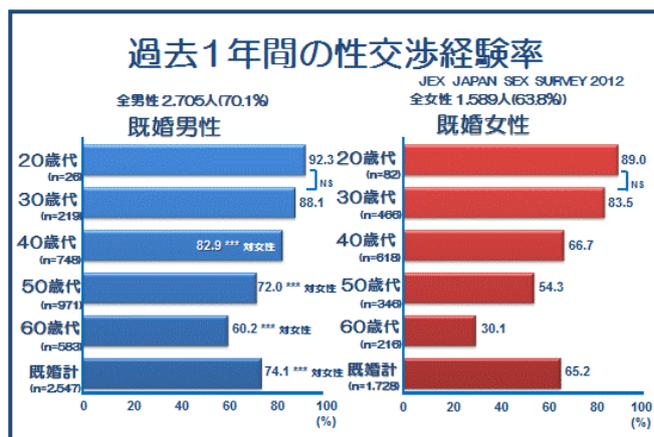
### 4-3. 未完成婚も少なからずいる

既婚者は年齢を問わずセックスは行われるものと思いがちですが、棒グラフの右端に既婚者男性で性経験のないもの13名(0.4%)、女性9名(0.5%)という結果を示しております。一時『成田離婚』という言葉が用いられたことがありましたが、夫婦でいながら性的関係をもたないものを『未完成婚』と呼び、夫婦間において深刻な問題が介在していると云われています。

## 5. 最近1年間の性行動

### 5-1. 最近1年の間にセックスをしましたか？

今迄は性体験について述べてみましたが、最近1年間の性行動として動的な性的の実態について検討していくことにします。



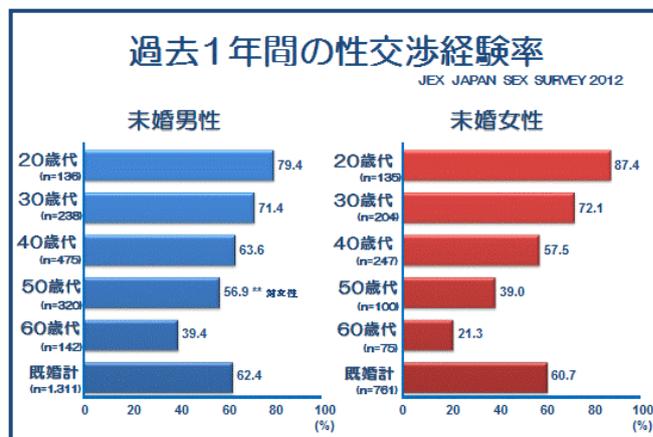
既婚では必然的に性的関係があるものですから未既婚別に集計を行いました。

最近1年間に性交渉を持った既婚男性 74.1%、女性 65.2%という結果でした。20歳から69歳という幅のためか男女共に8割以上はいるという目論見は崩れてしまっていたのです。

20歳代で9割前後、30歳代8割半ば、40歳代では女性が7割を下回っていました。セックスレスというより、セックス離れが想像を超えていました。さらに女性の50、60歳代女性は54.3%、30.1%とさらに低値で、セックス離れはより顕著でした。

20~30歳代既婚女性での2割弱にみられるセックス離れには、彼女らの家族構成について不明ですが、少子化に大いに関係しているのではないのでしょうか？

未婚者でみますと男女共に性的関係をもっていたものは6割強と、ほぼ同じ値でした。

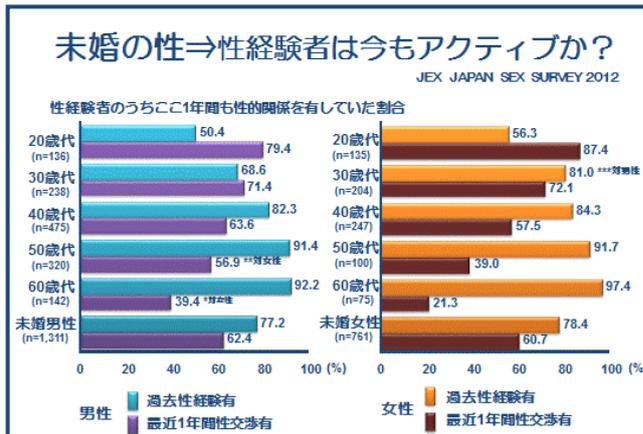


既婚者に比べるとともに低値であったことは当然のことといえるでしょう。しかも既婚同様に年齢が高くなるにつれて性的関係の繋がりが失われていることが顕著です。特に、女性が50歳を過ぎると、結婚して生活を共にすることの煩わしさを感じていくようにも思われます。

いずれにしても、未既婚を問わず50歳代以降女性の性への関心は失われているのでしょうか？

## 5-2. 未婚女性のセックス離れの意味するものは…？

未婚者の性と題して、棒グラフの上段に各年代における性経験者の割合を示し、下段には最近1年間に性交渉を持った年代での割合を示してみました。



20歳代の男性の性経験者は50.4%でこのうち最近1年間でも性交渉を持っているのは79.4%となっています。同様に女性は性経験率が56.3%、うち1年間に性交渉を持っていたのが87.4%となっており、男女間に差はあまりみられていません。30歳代になると性経験率は女性の方が81.0%と有意に高かったのに、現在の性行動率は男性71.4%、女性

72.1%と同じ値になってきています。40歳代では男性の方にアクティビティが高くなり、50、60歳代では有意差を認めるほどに、その違いがみられます。この差は性経験はしたものの、この1年間はセックスとは縁がなかったといえます。

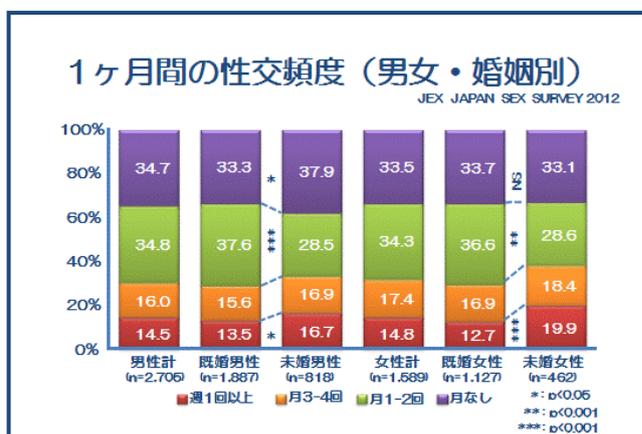
『性』に対する基本的な考え方、『生殖の性』の捉え方の違いが介在しているのではないのでしょうか？国立社会保障・人口問題研究所で行っている「第14回出生動向基本調査『結婚と出産に関する全国調査：独身者調査』」に示されている結婚することの利点に「ある」と答えているのが男性62.4%に対し女性87.6%と高く、その利点として「子どもや家族を持てる」ことを挙げているのが47.7%（男性33.6%）と半数近くを占めていました。女性にとっての『性の営み』は母親になることも大切なのです。

## 6. 性交頻度が語りかけてくるもの

### 6-1. セックスの頻度

最近1年間にセックスを行った男性2,705名と女性1,589名を対象に最近1ヶ月間のセックスの頻度についてみます。その頻度を生殖行動に叶う頻度として『週1回以上』（Ⅰ群）、お互いの絆を深めるに叶う頻度『月3~4回』（Ⅱ群）、生殖行動には遠くルーティンセックスとして『月1~2回』（Ⅲ群）、そしてセックスレスの『月1回も無』（Ⅳ群）と4つにカテゴリーに分けて考えてみました。

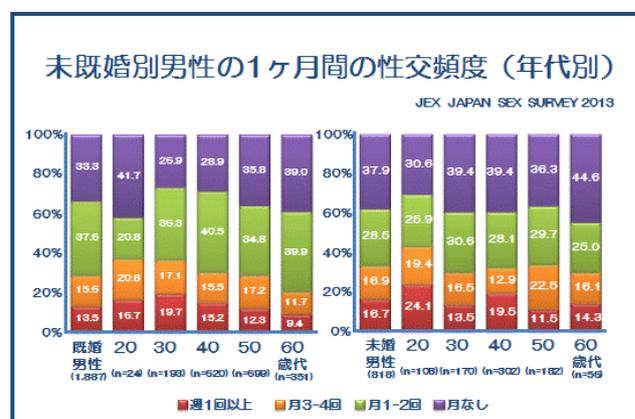
### 6-2. 30歳以降の既婚者に多い『ルーティンセックス』



Ⅰ群は男性14.5%、女性14.8%、Ⅱ群16.0%と17.4%、Ⅲ群34.8%と34.3%、Ⅳ群のセックスレスは34.7%と33.5%と男女間に殆ど差を認めていません。ところが既婚者と未婚者を比べてみますと男女共に『週1回以上』のⅠ群において未婚者が有意に頻度が高いという結果でした。そして『月1~2回』のルーティンセックスを思わせるようなⅢ群は既婚者に

多いという結果だったのです。男性の『月1回も無』のセックスレスが未婚者に高値でした。

ここでいう『ルーティンセックス』とは、ロビン・ベーカーが「精子戦争」で使

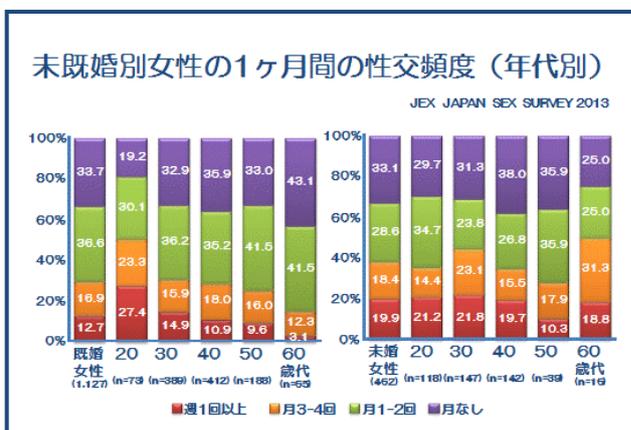


っていた夫婦としてのお勤めのセックスの意味合いが込められています。したがって未婚女性にはルーティンセックスの言葉はあてはまらないかもしれません。

男性の年代別の未既婚でみますと既婚男性では年を追う毎に『月3回以上』の頻度が低下しセックスレスが増えていることがわかります。未婚男性

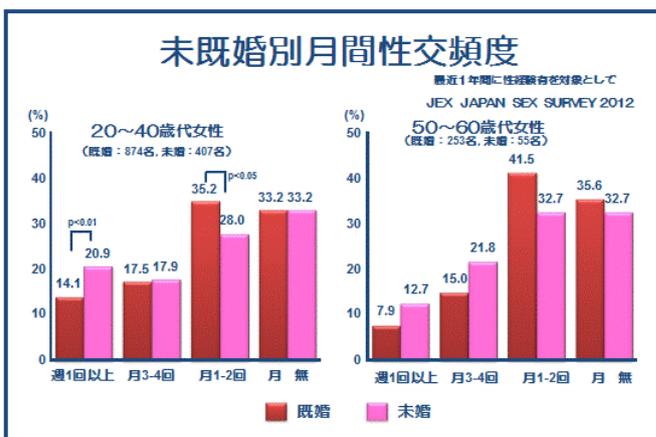
では多少の差はみられるものの、系統だった違いはみられていません。

未婚であるがゆえにセックスパートナーの常在性に欠けていることも考えなければなりません、性欲解消の背景が残されているのでしょう。



女性も男性同様既婚者に年代を重ねることにより『月3回以上』の頻度は低下し、ルーティンセックスは30、40歳代は35%、50、60歳42%と変化なく維持し、セックスレスが30歳代から3分の1を推移し60歳代では4割を超えるに至っています。未婚者では年代間格差があまり変化していないことが窺われます。

### 6-3. 性成熟期女性と中高年女性の性



妊孕能の高い20~40歳代女性と妊孕能の低下した50~60歳代を未婚別に月間性交頻度をみても、妊娠の可能性の高い週1回以上のI群において、既婚よりも未婚女性に多かったという結果がでていたのです。そして妊娠の可能性が低いであろう月1~2回のIII群が既婚に多いという結果です。この数値

の違いは統計学にみても意味あるものです。50~60歳代でも1年間性交経験無しは未婚者に多いものの、I、II群の性交頻度を保っているのが既婚よりも未婚女性に多いです。『生殖の性』です。さらに、『月1~2回』の頻度は既婚者の『ルーティンセックス』と未婚者が持つ性の意味合いと基本的に異なるものと考えます。

## 8. 性行動の小括

---

### 女性の方が性の始まりは早かった

---

先ず初めに初交年齢を検討してみました。男女とも成人式を迎えた20歳が最も多く、しかも女性が平均年齢でみると0.5歳男性よりも早いことが示されていました。そして、20～44歳までの性成熟期群と45～69歳の中高年期群に分けてみると、男性では中高年期よりも性成熟期の方が0.5歳早くなっており、女性では性成熟期の方が1.6歳早くなっていました。男女間の比較では中高年期では男性の方が早かったのですが、性成熟期になると女性の方が男性よりも早く経験をしていたのです。

### 性経験者は40歳までは女性が男性よりも多かった

---

性経験者は、20歳代女性で323名中217名(67.2%)と男性の54.4%に比べ有意に高値でした。30歳女性720名中670名(93.1%)で男性の80.7%に比べ30歳代でも女性が多く有意差を認めました。女性が多かった背景には既婚者が含まれており、必然的に高値となっていました。未婚者のみで検討すると20歳代女性は240名中135名(56.3%)に対し男性50.4%と低く、30歳代女性252名中204名(81.0%)、男性の68.6%に比べ有意に高値を示していました。40歳までは未婚であっても女性の方に性経験者が多かったのです。

尚、既婚者における未完成婚は男性13名(0.4%)、女性9名(0.5%)に認められました。

### 結婚すると女性はセックスをしなくなる

---

20歳代既婚女性は1年間セックスをしていないのが16.5%、30歳代で33.3%と約3分の1に、40歳代で45.7%と半数近くとなっていました。40歳を過ぎてくると女性のセックス離れが起き始め、50歳以降から未既婚女性とも顕著に表れていました。パートナーと生活を共にしている既婚者においても同じでした。

1子出産後、子育てに追われてセックスどころではなくなってきたのだろうか？その背景を精査する必要があるようです。セックスレスで取り上げることにします。

## 性交回数は既婚者よりも未婚者の方が多い

---

特定されたセックスパートナーをもちながら1ヶ月における性行為の回数を聞いてみたところ既婚者よりも未婚者の方が男女共に『週1回以上』のI群が多かった結果には驚かされるどころでした。しかも既婚者においては年齢を重ねることにより『ルーティンセックス』と『1ヶ月性行為無』というセックスレス夫婦が増えていたということです。

これらの結果から、『連帯の性』、『快樂の性』、そして『生殖の性』が一度、満たされれば『生殖の性』を司る女性は、セックスから遠ざかって行くのだろうか？

これまでの性行動の実態をみるに、女性が『生殖の性』を視点においた形で変動しているようにも思えます。その点、男性は異なったところで『性』を捉えているようでした。

## 第Ⅱ章：生殖の性（産む性・産めない性）

---

### 1. 妊娠・出産に備えての性

---

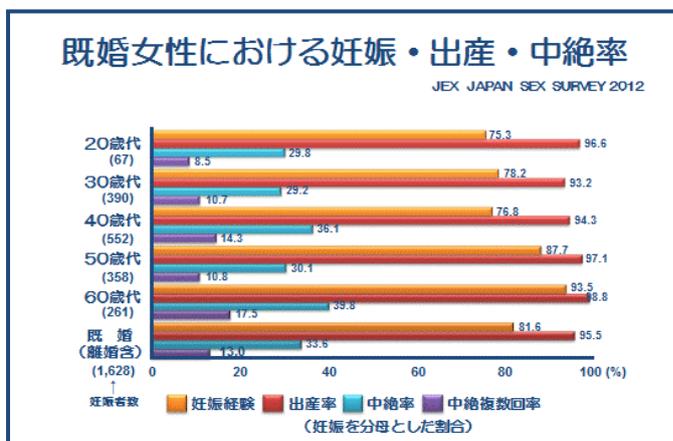
性行為、その本質は子孫を残し、次世代を繋いでいくことです。それは『逞しい男』を、若しくは『次々世代を残しやすい多産な女』と女性には遺伝子に組込まれ、種の存続といったフィメールチョイスの機能が備わっていると云われています。

自らの胎内に自らの遺伝子を半分持って新しい生命を宿すのですから、より良い遺伝子の持った男と分かち合いたいと願うのは自然の摂理と云えましょう。それが人類の発展をもたらしてきたのです。遺伝子に組込まれたフィメールチョイスの果たす役割は大きいのです。

しかし、性に対して我われ人類は様々な規範を作ってきました。今日の社会的規範は妊娠・出産は姻戚関係に無ければ『嫡出でない子』として扱われます。この非嫡出子の親権は母が単独で行うこととなります。この背景には「女は、その男の子しか持つてはいけない」という男社会の規範がもたらしてきたものでしょう。

第Ⅰ章で述べましたように未婚で性交渉を持っている女性は69.5%（586名中407名）でした。20歳代で87.4%、30歳代72.1%、40歳代57.5%とあり、未だ生殖可能年齢にある女性の性体験率です。そして『月1回以上』の頻度を保っているのが66.9%（462名中309名）、20歳代70.3%、30歳代68.7%、40歳代62.0%という結果でした。これは一頃、『婚前交渉』という言葉でその是非を論議されたことがあったように、この事で妊娠・出産ということになれば『嫡出でない子』として法的に処理されます。彼女たちの妊娠・出産の帰結が気になるところです。

### 1-1. 既婚女性は 80%が妊娠し、うち 95%は出産、中絶経験者は 34%

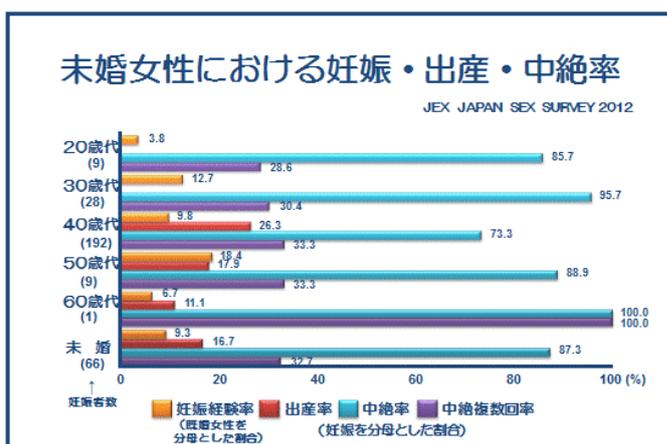


ジェクス調査では、既婚女性（離婚死別者を含む）1,994 名中 1,628 名（81.6%）が妊娠を経験しており、妊娠経験者 1,549 名（不詳除く）中 1,479 名（95.5%）が出産していました。人工妊娠中絶を経験していたものは 403 名（33.6%；中絶回数回答者数 1,200 名）、2 回以上の複数回の経験者は 156 名（38.7%；妊娠を分母におくと 13.0%）という結果

でした。

既婚女性は妊娠すると当然のことながら出産を選択していました。残りの 4.5%は流産、若しくは中絶ということになります。でも中絶の選択は既婚女性でも約 3 割は余儀なくされていたことです。しかも、1 度のみならず 2 度、3 度というように複数回の経験が 4 割弱であったことには、驚きとともに避妊はどうだったのでしょうか？気になるところです。

### 1-2. 未婚女性は 10%弱が妊娠をし、うち出産は 17%、中絶は 9 割弱



未婚女性 713 名中 66 名（9.3%）が妊娠し、66 名中 11 名（16.7%）が出産、シングルマザーとなり、中絶を選択したのが 55 名中 48 名（87.3%；中絶数回答者 55 名）、うち複数回は 18 名（32.7%）となっていました。

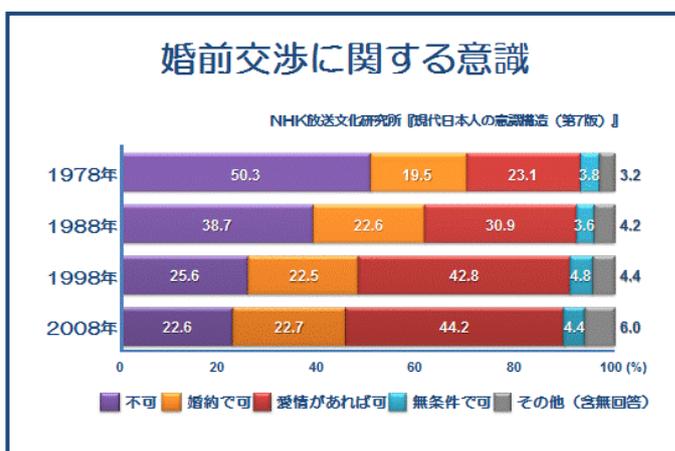
未婚女性は、既婚に比べ妊娠経験者は 9.3%と明らかに低い

数値が示されています。更に、妊娠すると 9 割近くが中絶を選択していたのです。そして出産に至ったのは 40 歳代以上の女性でシングルマザーになっています。出産した年齢が分りませんが、1970 年以前に生まれた女性であったことは、

世代の変わり目を意味しているのかもしれませんが、また、妊娠に気が付けば、それを契機に結婚という『できちゃった結婚』という選択もあるはずです。

いずれにしても、この数値の意味するところは、未婚者の性は産めない性であり、避妊にはかなり神経を使っていたのではないかと考えられます。また結婚しても妊娠できない人もいれば、子どもに恵まれない女性も少なからずいることは事実です。また、うっかり妊娠で中絶を選択せざるを得ない女性もいることも事実です。

### 1-3. 婚前交渉の是非

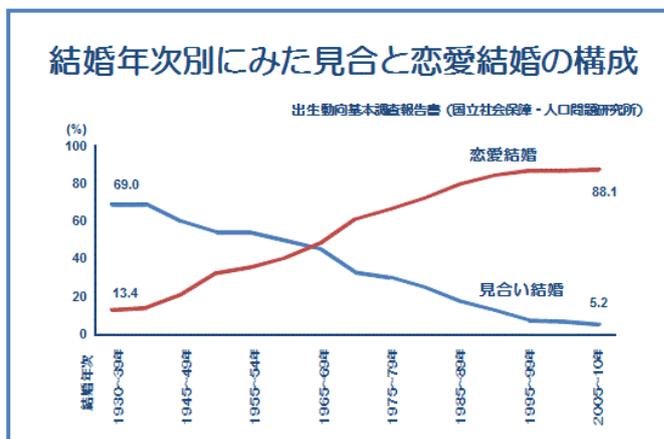


婚前交渉の意識についての調査があります。NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造(第7版)』(2010年2月発行)によりますと、「結婚式が済むまでは、性的な交わりをすべきではない」と否定する考えは1988年では38.7%であり、2008年では22.6%と大きく移り変わっています。30年前では5割をこえて

いたのです。今や婚前交渉を可とするのは7割を超えています。

国立社会保障・人口問題研究所が『第14回出生動向基本調査』の結婚と出産に関する全国調査で独身女性が『結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持っていかまわらない』と考えているのが2010年で83.2%でした。反対するのはわずか13.0%にしか過ぎません。独身男性もほぼ同じ値を示していました。未婚者におけるセックスはお互い『生涯の伴侶』を決めるための大きな役割を担ってきているのでしょう。

## 1-4. 今や！自由恋愛時代

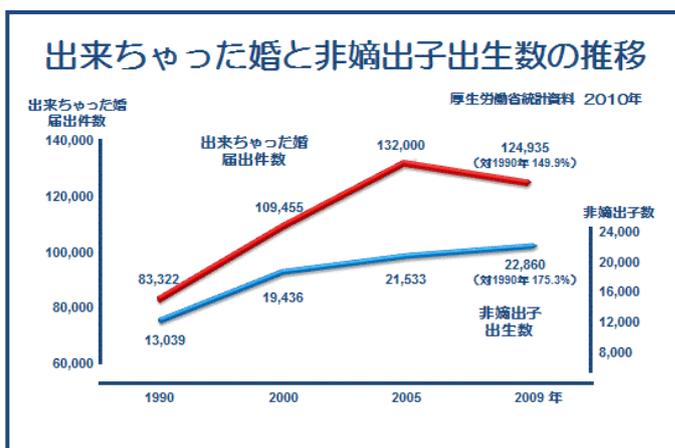


戦前は殆どが見合い婚でしたが、1960年後半頃になりますと見合い婚と恋愛婚がほぼ同じ割合となり、以降恋愛婚が主流となり、今では見合い婚はわずか1割を下回り5%程となっています。自由恋愛の時代と云えます。婚前交渉の是非といった論議はもはや遠い昔のようです。

この見合い婚は、男と女の仲を取り持つ世話人がいて結ばれる結婚形態を云いますが、当人同士のみならず、少なくとも家と家ぐるみを取り持つもので、複数のものが結婚形態に拘ることになります。恋愛婚になりますと、男と女の個々人の付き合いに始まり、後にその家族が追従するという形態になります。

この恋愛婚の形態は、戦後の団塊世代が大人の世界に入り込んできたために急速に増えたための結婚形態となってきたようです。すなわち今や自由恋愛時代なのです。

## 1-5. できちゃった婚とシングルマザーは増えている？



自由恋愛時代に入って、結婚に至るまでの交際期間が延長するようになりました。2010年の出生動向基本調査(前出)では4.8年、1987年の3.2年に比べ1.6年も長くなってきています。交際期間の延長につれ、妊娠を契機に結婚するという『出来ちゃった婚』の増加が著しくなってきたようです。

1990年の83千組に比較すると2005年では132千組となり1.6倍増となっていました。リーマンショックの煽りのためか2009年ではやや減少し1.5倍増に留まっていました。

1982年に池上千寿子著で話題となった「シングル・マザー 結婚を選ばなかった女たちの生と性」より非嫡出子の出産の急増がみられるようになってきました。2009年では23千人の出産が、これは1990年に比べ1.8倍増です。更に、後述しますが離婚件数の増加に伴って母子世帯数が1995年48万世帯から2006年79万世帯と1.6倍強の増加も相俟って、一つの社会問題として提起されてきたのです。

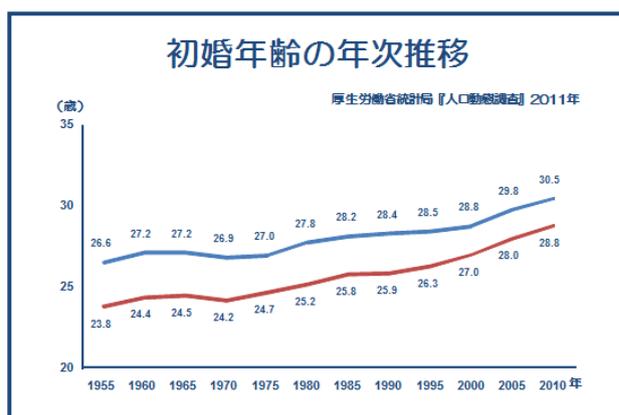
## 2. 社会調査が語る女性の立場

第I章では、現在の性行動を明らかにしてきました。初交年齢や性体験等をみますと女性の方がより行動的な状況が窺われてきました。性交渉の頻度も女性が、しかも若く未婚者に活動的であったと知らされてきました。

前項では自由恋愛の時代となり、恋愛婚が9割も占め、婚前交渉も広く受け入れられてきている事実が明らかにされました。必然的に男女間の交際期間が長くなり、この事が晩婚化傾向に拍車をかけているようです。

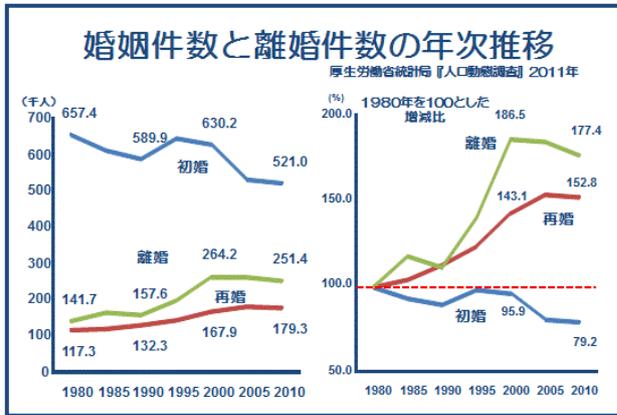
ここでは、厚生労働省の統計局が報告している「人口動態調査」等の統計資料に基づき男女の結婚や離婚などの傾向を垣間見てみることにします。

### 2-1. 晩婚化傾向の実態



自由恋愛時代になりますと、お互いが終生の伴侶として叶うものか否かの見定め期間が必要となり、恋愛期間の延長とともに結婚の時期が必然的に遅くなる傾向がみられています。男女間の年齢格差も狭くしながらの晩婚時代の到来です。

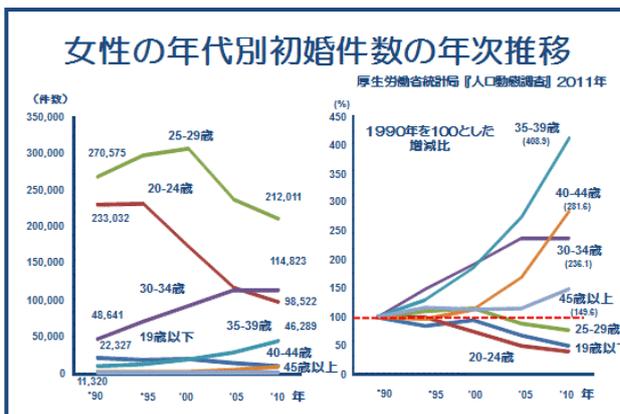
## 2-2. 結婚があって離婚 ⇒ 結婚・離婚・再婚の推移



婚姻、離婚、再婚件数の年次推移をみてみますと、初婚件数は年次減少していますが、1990年代に一時上昇がみられております。これは第二団塊世代が適齢期を迎えたのと同じです。再婚と離婚件数が増えてきているのが分ります。1980年を100と起点してみますと2010年では離婚が1.8倍に、再婚が1.6倍と増加し、初婚は2割減少していることが示されています。

1980年では10組が結婚すれば、その年2.2組が離婚していることとなります。それが2010年では4.8組が離婚と倍増しています。再婚は1980年10組の離婚に対し8組が再婚、2010年では7.1組とやや減少と云えます。シングルマザーの増える背景と、2000年代に入ると離婚しやすい環境になってきたのでしょうか？

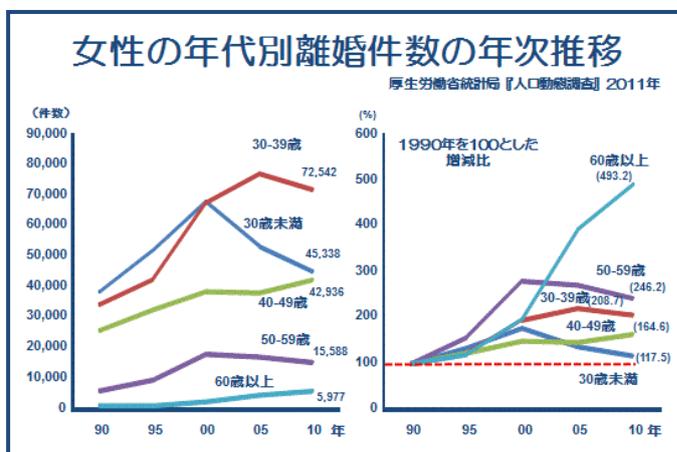
## 2-3. 初婚の年代別推移



女性の初婚件数を年代別年次推移でみますと、20歳後半が最も多いのですが2000年を境に減少しています。次に多かった20歳前半ですが、2010年には30歳前半と置き換わって第3順位となっています。そして30歳後半と続いています。

1990年を起点としてみますと30歳後半は4倍増、40歳前半2.8倍、40歳後半1.5倍増と晩婚化兆候を読み取ることができます。

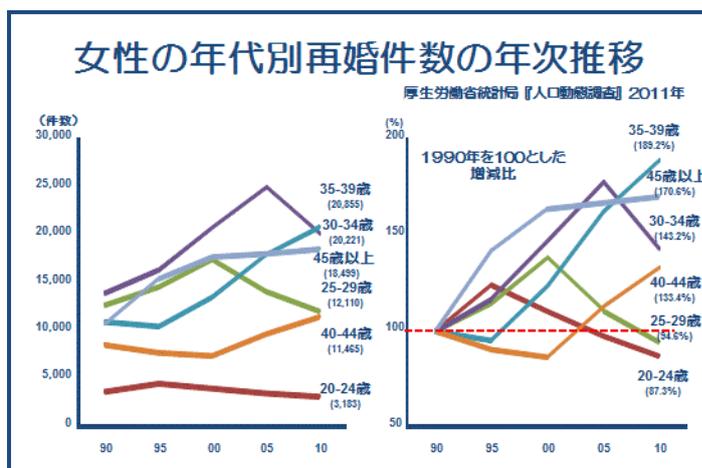
## 2-4. 離婚及び再婚の年代別推移



離婚件数の年代別推移を追ってみましょう。30歳代が2000年から30歳未満を越えて最も多い年代になり、30歳未満に40歳代が上昇が近づいてきています。

1990年代までは30歳未満の離婚者が多かったのが、晩婚化を迎えて30歳代に移り、40歳代も増えてきていることが窺われます。

1990年を起点としてみますと不況の煽りなのか、60歳以上の離婚者の著しい上昇もみられます。いわゆる定年離婚という社会現象といえるでしょう。



再婚は離婚があつてのことですから、離婚件数の推移に遅れて動いてきます。30歳後半が年次増加し30歳前半に置き換わっています。右側の伸び率をみても直線的に伸びております。40歳前半も同様です。また30歳前半は2000年を機に減少しております。結婚、離婚、そして再婚も晩婚化を明らかに差し示しています。

## 3. 結婚は家庭、家族、社会形成の第一歩

結婚は家庭、家族をなす次世代を繋いでいきます。それが合わなければ離婚、再婚となって理想の家族を築き上げて行きますが、子どもに恵まれない家庭もあります。そこには様々な葛藤もあるはずで、第14回出生動向調査によりますと6,705組の夫婦で子どものいないのが914組(13.1%)という数値でした。40歳代の夫婦で見ますと3,185組中258組(8.1%)とありました。ジェクスの調査では、40~69歳の初婚女性1,185名中出産経験のない女性が273名(23.0%)となっていました。子どものできない事も女性にとっては深刻な問題となってきます。

### 3-1. 第一子出生時の母体年齢の推移

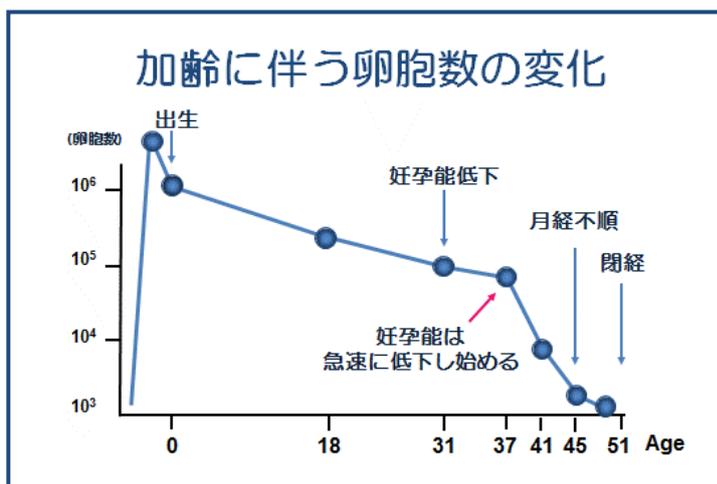


晩婚化現象に伴って必然的に第一子出生時の母体年齢も上昇していきます。出産年齢が上昇することは子どもを産む数が少なくなるということです。

なぜなら女性が産める年齢には上限があるからです。女性には閉経という生殖年齢に終わりを告げる一つのイベントがあります。

女性の母胎で子を宿し育み分娩、母乳を与えながらの育児があります。このときに母性を目覚めさせるために様々なホルモン環境の役割があります。分娩を円滑に引き起こすオキシトシンや乳汁分泌を促すプロラクチン等は母と子の絆を作り上げる大切なホルモンと云われています。妊娠・出産を迎えて『豊かな母性』が目覚めるのです。

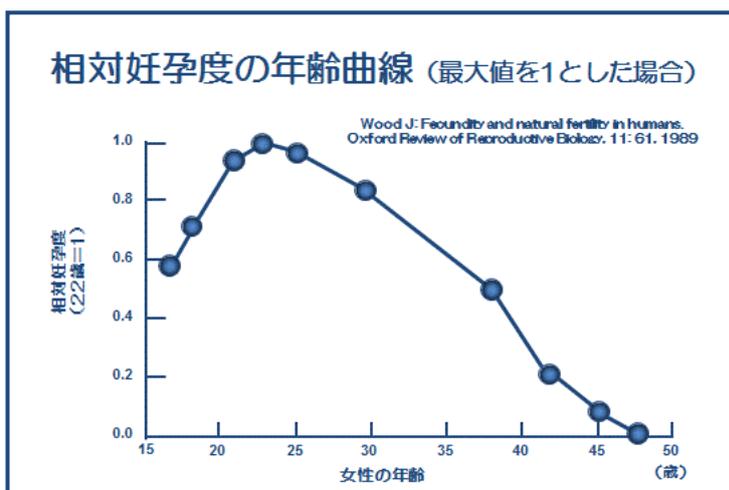
### 3-2. 女性には生殖年齢の限界がある！それは…



女性がお母さんのお腹の中にいる時に卵巣が作られ、その中には、最大で約7百万個の卵子が両側に入っているのです。そして生まれる時には、2百万個までに減ってしまいます。思春期になって排卵し始める頃になりますと4~50万個と驚くほど減っています。

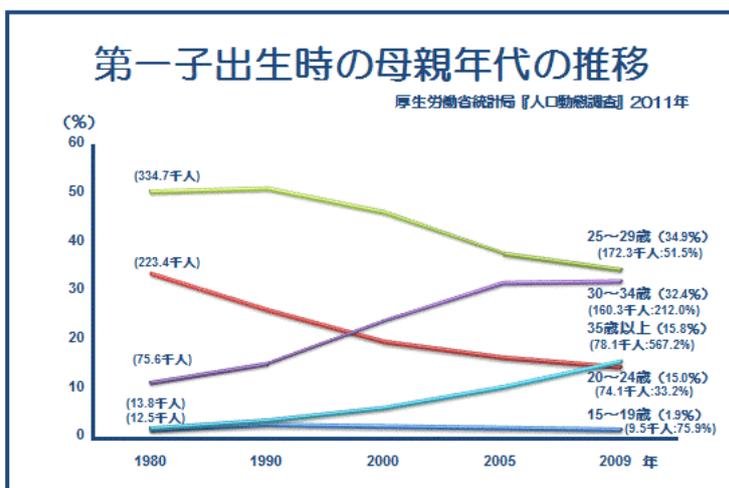
それは良い子孫を残すために遺伝子に組込まれたプログラムがあり、良い卵だけを排出するように仕組みられているのです。自然淘汰の働きです。37歳を過ぎる頃から妊孕能は急速に低下すると云われています。2百万ほどの卵子を持って生まれ、そして思春期の頃に排卵し始めるのですが、それまでの十数年間は卵巣の中で眠っています。それ以降新たに卵子をつくること

はありません。卵巣の中で自然淘汰は繰り返され卵子の数は減っていきます。40 歳になっても排卵し妊娠することはできます。でも 40 年間卵巣の中で眠り続けようやく排卵する卵です。卵子にも老化は起きるのです。なかなか受精しにくくなっています。そして 51 歳頃に女性は閉経を迎え生殖能の終焉を告げます。ですから子どもを作る間は決まっているのです。20 歳で結婚した女性と 30 歳で結婚した場合では、子作りには大きなハンデを背負っているのです。



女性が妊孕能の最も高い年齢は 22 歳だと指摘する学者がいます。それ以降は、少しずつ年を取り卵の老化がみられます。37 歳頃より急速に衰えてきます。

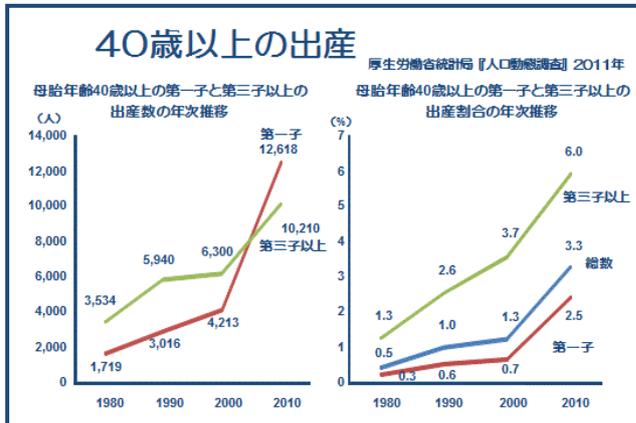
このようにして晩婚化社会は女性にとって、子孫繁栄の戦略にとって極めて不利な環境になるのです。



第一子を産むお母さんの年齢をみますと、20 歳前半のお母さんは 7.4 万人の赤ちゃんを産んでいますが、30 年前の 22.3 万人に比べ 33.2%程の数値に低下しています。20 歳後半をみましても 17.2 万人で 51.5%と半数近く減ってきています。30 歳前半は 16 万人と 2.1 倍増、35 歳以上では 7.8 万人 5.7 倍増と、この数値か

らみまして 35 歳以上の異常なまでの上昇が指摘されます。

### 3-3. 高齢出産にはリスクが伴う



高齢出産には多少のリスクはつきものと考えなければなりません。特に初めての妊娠での分娩は要注意です。

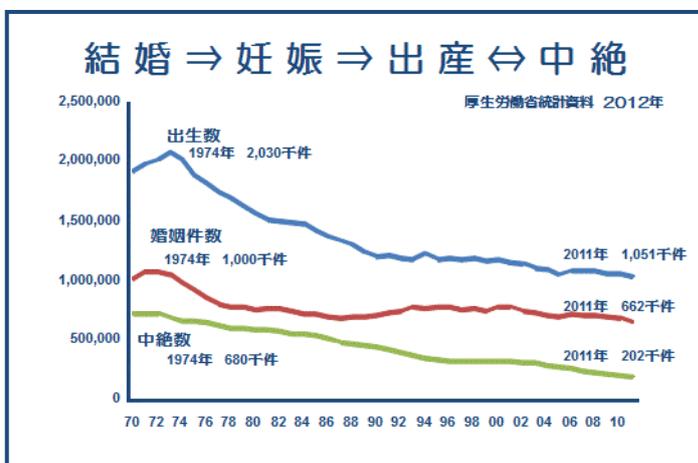
1980年の40歳以上での初産数はわずか1,719人で全出生数の0.11%にしかすぎませんでした。2010年には12,618人と7.3倍も増えています。全出生に対しては1.18%程度とわずか

かです。でも、その増加は2000年以降から著しいことが示されています。この10年間の急増は体外受精等と云った高度生殖医療技術の目覚ましい革新によるところが大きいのです。

いちど出産を経験しますと二人目、三人目となるにつれお産は容易になります。それを示すものとして、参考までに三人目以上のお子さんを40歳以上で出産した数で見ますと2010年では10,210人が生まれています。確かに増えていますが、30歳代からの出産の後、40歳で三人目となっているのです。

2010年の40歳以上は、その年代の前出産の3.3%でしたが、第一子目だけをみますと2.5%で、三子目以上の群では6.0%となっています。初めての妊娠⇒出産は30歳代で、しかもできるだけ早いうちに経験しておきたいものです。

#### 4. 望まない妊娠を避けるために⇒人工妊娠中絶の問題

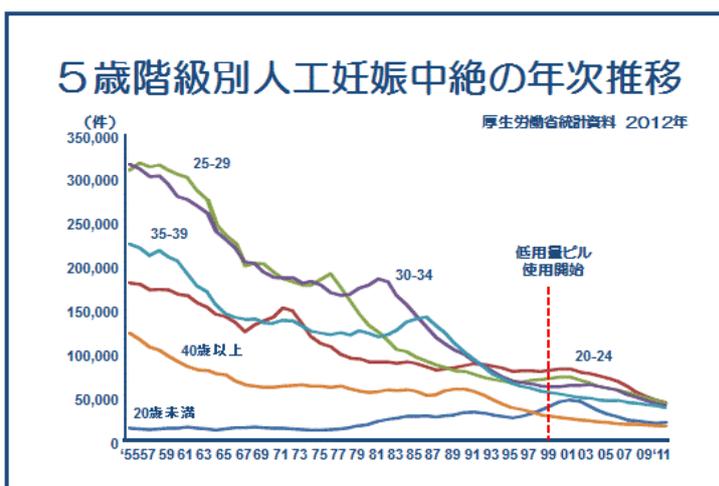


わが国の社会は『結婚』を迎えることによって、『妊娠』し家庭が築かれていきます。その結婚、出産の動態を追ってみますと婚姻数と出生数は平行に推移していますが、1974年時では、1組のカップルが届けられたとき2.03人が生まれています。2011年では1,051人の出生数で1組当たり1.6人という

計算になります。その分だけ少子社会になってきたといえます。

妊娠⇒出産という図式だけではなく、望まない妊娠であれば人工妊娠中絶という選択もあります。その年次推移は、婚姻件数の推移をみますと1980年以降はほぼ横ばいに推移していますが、出生数は徐々に減少してきています。人工妊娠中絶件数はさらに強い減少傾向を示しています。

#### 4-1. 妊娠中絶は激減してきている



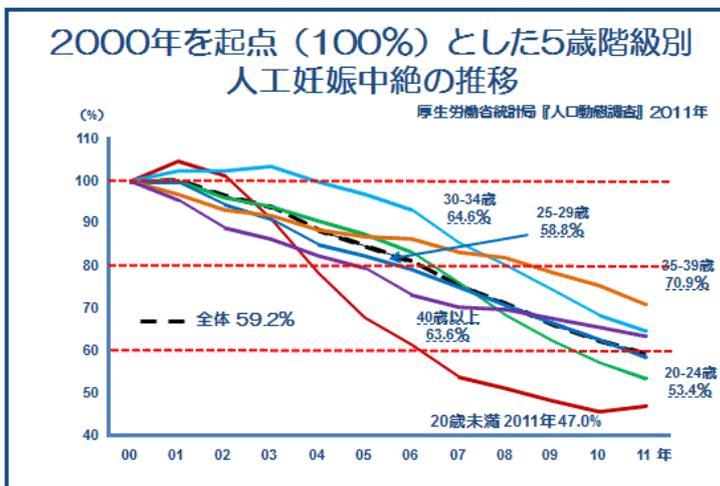
中絶の推移を5歳階級別で追ってみると、20歳代後半と30歳代前半が最も多いのですが、他の年代層とともに減少しており、1990年頃からは減少傾向が留まり横這い状態に移行しています。

40歳以上は、それ以降も減少していますが、20歳未満が一時的に上昇しているのが示

されています。

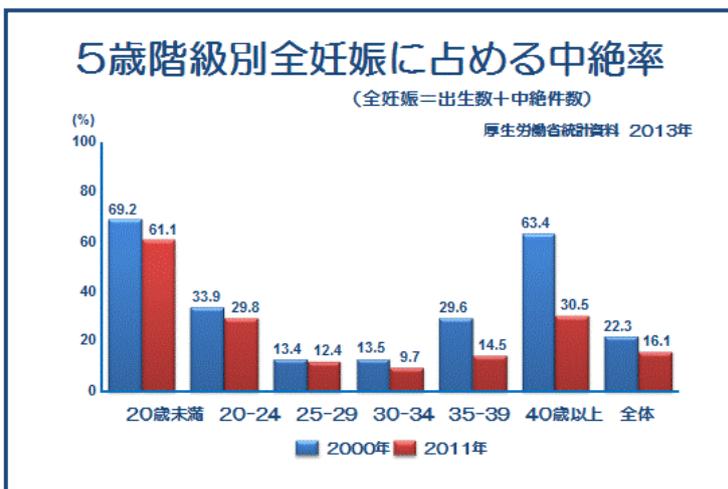
この間は望まない妊娠を避けるための女性たちの闘いだっただのかもしれませんが。1970年初めにピンクのヘルメットを被って女性解放運動を行った『中ピ連（中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合）』、1980年代は低用量ピルの使用許可を求めての臨床試験が始まりました。1990年初めには『エイズ蔓延に拍車をかける恐れ』を名目にピル承認が閉ざされました。エイズ問題と避妊とは全く異次元のところでの論争でした。10年近くを費やしてようやく終止符を打つことができたのです。この20年間にピル（避妊）論争が起きていたのです。

#### 4-2. 低用量ピルは、避妊の意識改革に大きく貢献した



低用量ピルや銅付加子宮内避妊具が1999年後半より2000年に発売され使用できるようになりました。女性が自らの意志で確実に避妊できるとしてメディアを通して様々な情報が流されました。その影響を多くの女性は受けたはずですが、その影響を人工妊娠中絶数の変化を年代別にみてもみまると、20歳未満が最も強く

影響を受け2000年を100としますと47.0にまで下がっております。次が20歳前半で53.4、20歳後半58.8になっています。年代の若い女性に影響を与えているのが窺えます。



5歳階級毎に女性が妊娠するとどれくらいの割合で中絶をしているのかを出生数と中絶数を全妊娠と仮定して中絶の割合を2000年と2011年を比較してみました。

全体では22.3%から16.1%と6.2ポイントの減少です。年代別で最も落差の大

きかったのは 40 歳以上で 32.9 ポイントの低下です。この背景には 40 歳代の性の営みは『産む性』に代わっているのです。でも 20 歳未満では未だ 6 割が中絶を選択していることです。この年代の中絶の減少率は大きかったのですが、経済的側面を伴って『産めない性』が大きく横たわっています。晩婚社会が女性にとって思わぬ問題を引き起こしたのです。

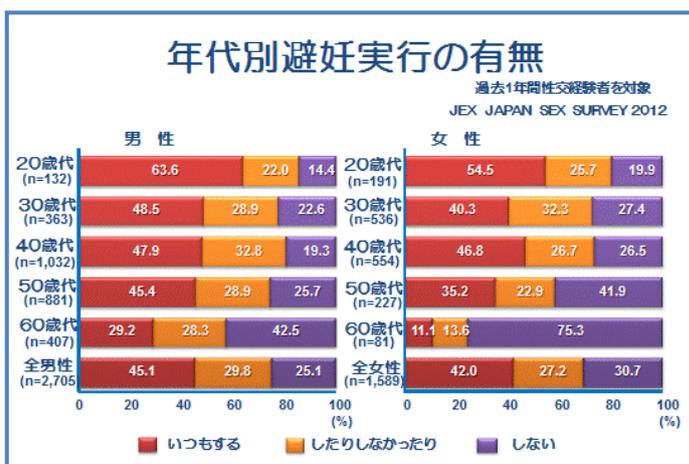
いずれにしても、1980 年代半ばよりメディアを通し様々な『低用量ピル論争』を巻き起こしてきたことは、使う、使わないに拘らず避妊という意識改革には大きく貢献してきたことは否定できないところでしょう。

## 5. 避妊の実際について

性の営みには妊娠することが付いてきますが、これは女性が子どもを宿すことであって、その妊娠が望まれているかいないかによって、それを避けるために避妊という手段を講じなければなりません。妊娠を望んでいる場合には避妊を行いませんが、望んでいなければ避妊を講じるでしょう。その意志は女性の置かれた立場や環境等と云った状況によって異なってきます。

また、既婚や未婚といった姻戚関係によっても異なってきます。既婚であっても子どもを欲しくない時期もあります。間隔を開けたいというときもあるでしょう。でも概ね結婚していれば、子どもを欲しいと思う心で性の営みを取ることが多いでしょう。

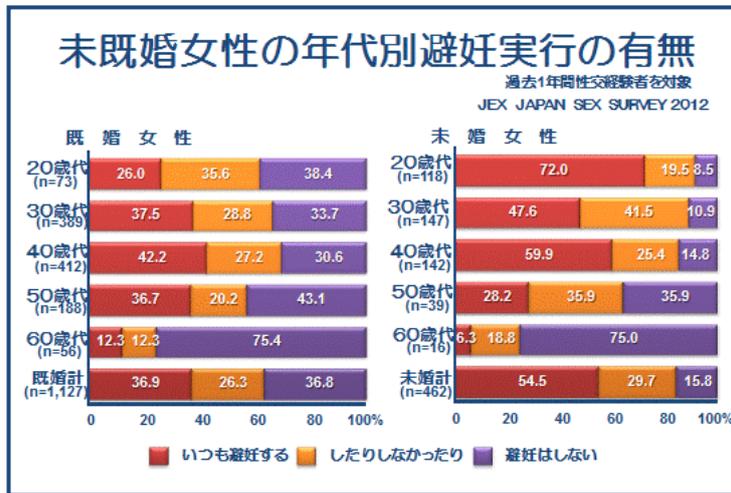
### 5-1. 避妊に対する意識、男と女で違いがある？



避妊の実際について、ジェクス調査からみてみましょう。過去1年間にセックスを経験している男性 2,705 名、女性 1,589 名に問いかけています。「いつもする」が男性 45.1%、女性 42.0%、「したりしなかったり」男性 29.8%、女性 27.2%、「しない」25.1% に対し女性 30.7%と女性が 5.6 ポイント上回っていました。産む、

産まないの選択は女性が握っており、産む方への意識が男性より上回っているということではないでしょうか？

## 5-2. 未婚と既婚という女性の環境で避妊への意識が異なる？



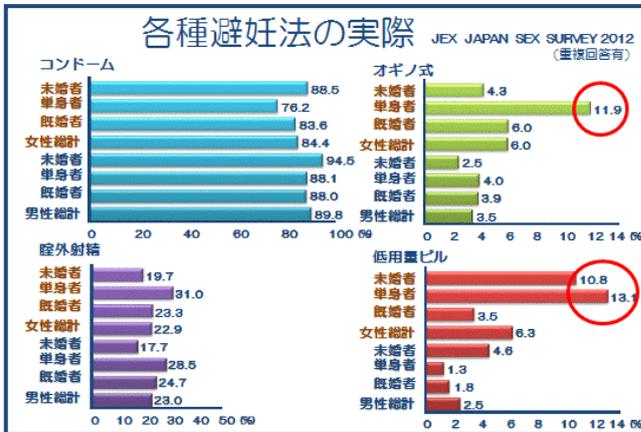
既婚女性では、避妊をする、したりしなかったり、しないが、3等分に分かれています。20～30歳代は「しない」ほうが多く、「子どもを望んでいることが多い」と考えることができます。40歳代は「避妊をする」方が増えてきています。産み終え世代に入ってきていることが窺えます。50～60歳代にな

ってきますと「しない」が増えてきています。これは閉経を迎えて生殖年齢を終えたためと考えられます。

未婚女性では、趣きが少々異なってきます。社会的規範から考えると産めない性での性の営みだからです。避妊を講じる女性が多いのです。しかし、30歳代、40歳代では「避妊をしない」が少しずつ増えていきます。これは「妊娠したら、結婚して産めばよい」という考えが芽生えているはずで、50歳代になるとさらに増えているのは閉経という現象も相俟っているためだと考えます。

このように未既婚別、年代別で女性の置かれた立場での妊娠に対する意識の違いを垣間見ることができます。

### 5-3. 避妊法の実際



そこで実際にどのような避妊法を講じているのでしょうか？その殆どは『コンドーム』による避妊法と云えます。男性は90%、女性85%が答えています。次に多いのが『膈外射精法』です。男女ともに23%でした。ここで注目することは単身者に本法を講じるのが男女共に既婚者より多いということです。一度結婚を経験し、妊娠も8割は経験している

人たちです。避妊に対する意識が甘く、膈内に射精さえしなければよいという考えが多いようです。この考えは単身女性に『オギノ式』を講じるのが多かったのは自分で守らなければという意識ではないでしょうか？

『オギノ式』や『低用量ピル』の避妊法は女性が主体となります。女性全体で6%程が取られています。特に、『低用量ピル』の避妊を取る女性は未婚・単身者に多くみられています。既婚女性においては、避妊を相手任せと捉えているようです。

『低用量ピル』は女性に確実な避妊効果をもたらすだけでなく、生理痛の改善、サイクルコントロール等と云ったメリットもあり、子宮内膜症や子宮筋腫などの予防効果などにもつながり、大いに勧めたいところです。

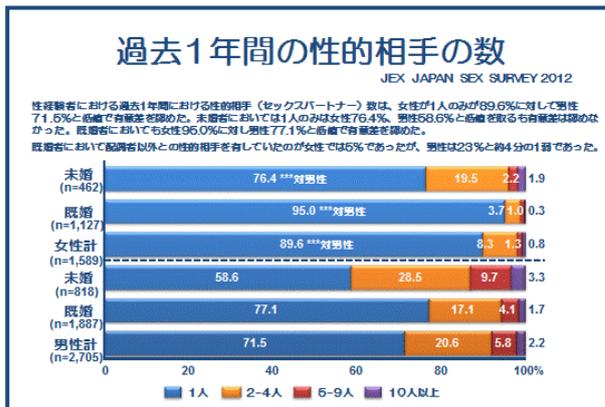
## 第三章 複走する性

### 1. 複走する性

複走する性とは、性の営みが冒頭に述べたように種の保存に寄与する情動行動であり、生殖行動と情動行動の2面性があります。この営みには通常特定の男と女がお互いの絆を強める『連帯の性』とお互いが喜びを分かち合う『快樂の性』とが対をなした『情動行動』があって『生殖の性』が叶うというのが一般的な社会規範となっています。

理想の番いを成すためにも、お互いを確かめ合うには様々な形態をとることも必然的に起こり得ることでしょう。ここでは、その性のあり方において見えかくれする性の問題を取り上げてみます。

#### 1-1. 性的パートナーの数



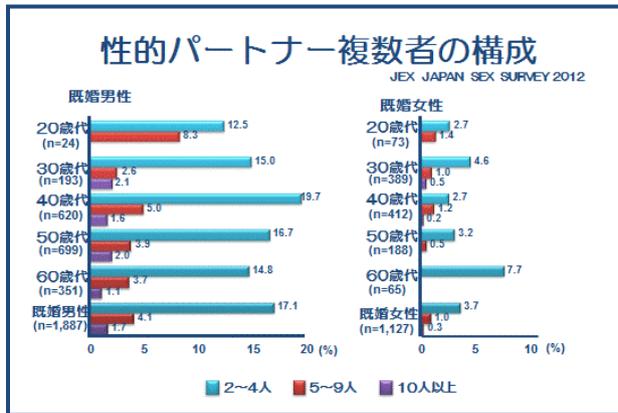
お互いが生涯の伴侶を求めるために、初めての性の営みで決められているのでしょうか？何人かの人と関係をもって確認し合って決めて行くのでしょうか？ここでは、ジェクス調査からみて行くことにします。

過去1年間に性的関係をもった人で、その性的パートナーの数をみますと、女性は1,589名中1人だけが1,424名

で89.6%でした。残りの11.4%は複数ということになります。未既婚でみますと既婚女性は95.0%、未婚76.4%が1人のみでした。一方、男性は2,705名中1,933名71.5%、既婚77.1%、未婚58.6%という結果でした。

明らかに男性において複数の性的パートナーを持っていたということになります。ここに男性の『能動的性』、女性の『受動的性』の違いがあるのでしょうか？

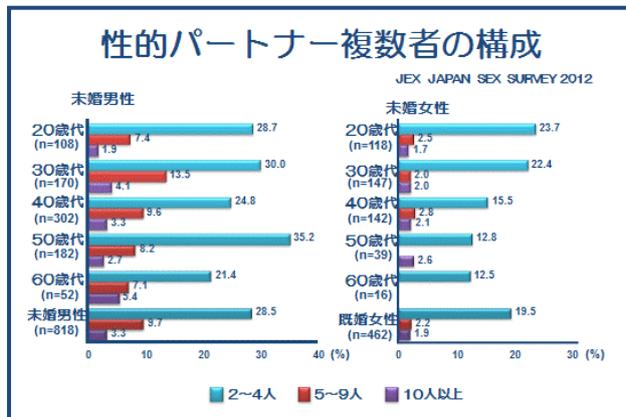
## 1-2. 複数のパートナーを持つ者の年代層は？



複数のパートナーを持つ年齢層が先ず気になります。そこで「2人から4人」、このクラスは比較的特定された性的パートナーと、「5~9人」は比較的プレーボーイ（ガール）的要素、「10人以上」はそれを越えているグループとして括ってみました。また、既婚と未婚ともその背景が異なるかもしれないと思い分けてみま

した。

既婚者では、特定された2~4人群が多く男性では40歳代がピークをつくり、50歳代へと移行しているようでした。女性は全体でも低く5%程度でしたが、60歳代が最も多く、前項で述べました定年離婚の前兆のようにも思われます。次に多かったのが30歳代で『不倫』の背景が強く窺われるところでした。



未婚群で見ますと2~4人という特定されたパートナーの様な形で、男性では年代格差はあまりみられていませんが、20~30歳代が20%強と多く、パートナー探しの様相が窺われました。

未婚で10人以上が男女共に3%前後に認められることは、生業的な背景を有しているようにも思われると

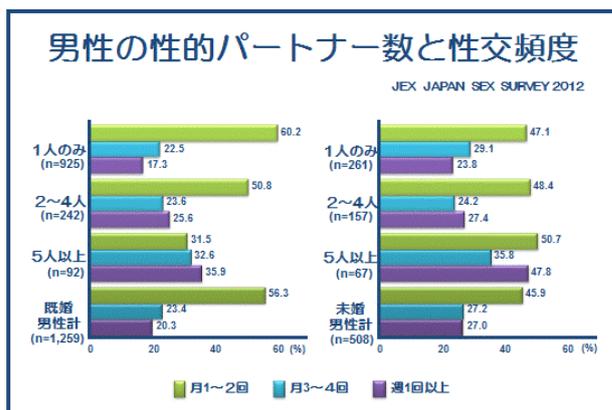
ころでしょう。

## 1-3. 不倫関係は「どの程度起きている」のか！

1年間の性的パートナーが2~4人という枠で捉えてみました。配偶者や恋愛関係とは異なったものであり、『不倫』的背景が窺われるところで男性40~50歳代の生活が安定してきた群の20%前後にみられていました。女性は少ないものの30歳代と60歳代に5~10%の間で起きる可能性が示されています。

未婚者では、やはり生涯の伴侶をみいだすための背景が強いのではないかと考えられます。また、未婚で1年間に10人以上の性的コンタクトともなると性的な営みに生業（風俗）的背景が大きく係わっているのではないかと考えます。

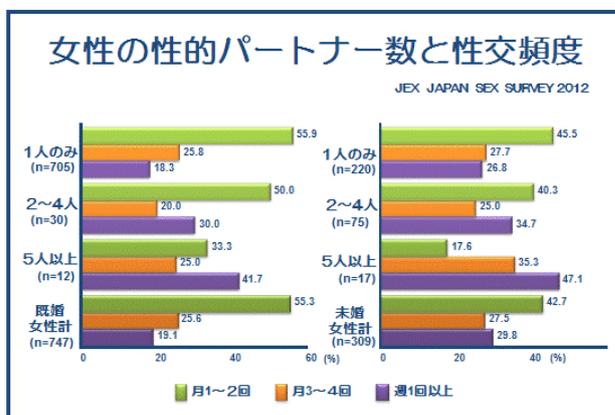
#### 1-4. 性的パートナー数と性交頻度



性的パートナー数と1月の性交頻度について検討してみました。先ず男性の未婚者では、『月1~2回』、『月3~4回』、『週1回以上』の3つのカテゴリーでみて両者間に殆ど違いが認められておりません。でも、年間5人以上の性的コンタクトを持っているグループに『週1回以上』が1人のみの17.3%に比べ35.9%と有意に増えています。

えています。

性的パートナー数と性交頻度が、パラレルに増えているということは『性的欲望』、『性欲』と男性の場合強く関係していることが考えられます。



女性の場合、複数者が共に分母の数の少ないためもありますが、5人以上で未婚とも『週1回以上』の割合が5割弱でした。

この背景には5人以上になると風俗的な様相が強く窺われます。

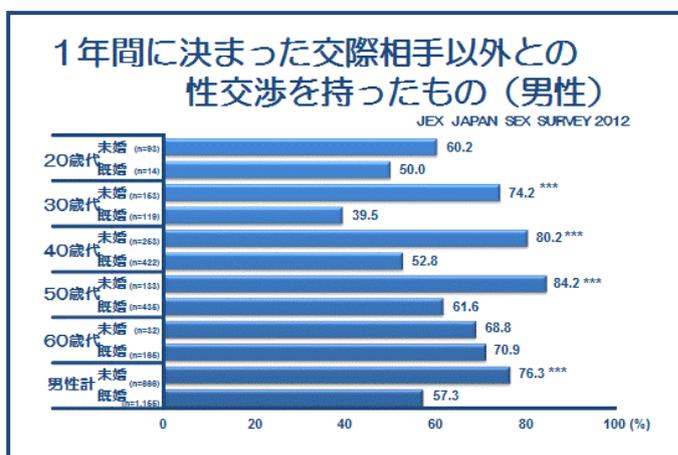
#### 1-5. 不倫 ⇒ 人は誘惑に弱い生き物であった

不倫という言葉、倫理規範に外れた行為と云われています。不倫＝姦通（かんつう：adulterous affair）とは社会的、道徳的に容認されない不貞行為であり性交渉のことを意味しています。不義、密通ともいわれています。江戸時代では、死刑、さらし首に処せられていました。戦前までは、『姦通罪』として法

律で厳しく規定されていましたが、1947年に新たに施行された日本国憲法には男女平等という規範に基づいて廃止されました。

でもこの『姦通罪』は旧刑法第183条「有夫の姦通したるときは、2年以下の懲役に処す。その相姦したるものもまた同じ」と規定されていたのです。これは妻が夫以外の男性と通じたときは、本人も相手の男性も共に罰せられており、その逆の夫が妻以外の女性と通じて、相手の女性が人妻でない限り罰則規定はなかったのです。

時は移り、夫が浮気をしていても妻の方からは何の申し立てもできなかった時代から、妻の側から離婚の申し立てができるようになってきたのです。確かに、このようなケースでの離婚もかなりのウェイトを占めているのが現実となっています。

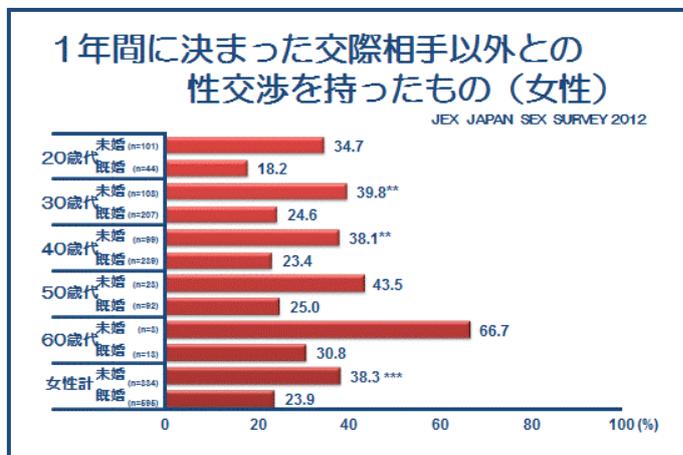


実際に、このような不倫行為が、どの程度行われていたのでしょうか。過去1年間に決まった交際相手（配偶者・恋人）以外との性的コンタクトを持った人の割合についてみました。

男性1,821名中1,170名（64.3%）が持ったと回答していました。女性929名中270名（29.1%）とあります。

如何に多くの男性が不倫的關係をもっていたかが窺われます。未婚76.3%に対し既婚57.3%です。この違いは、既婚者は明らかな「不倫行為」ですから、低くて当然でしょう。でも過半数を超えていたのには驚かされます。

年代ごとにみますと、さらに驚かされる事実があります。60歳代において未



婚者よりも既婚者の方が高値を示していたことです。最近、定年離婚が急増していることと関係があるのでしょうか？考えることが必要です。

女性についてみましても、男性に比べ低いものの未婚女性に多いことが示されています。しかも男性同様に、年齢を重ねる

ほど多くなっていることが示されています。

女性も4分の1から3分の1に不倫行為が行われていたのです。しかも最近1年間の間という条件のもとにです。特に、60歳既婚女性では30.8%と他の年代よりも5ポイント上昇しています。定年離婚の予兆でしょうか？

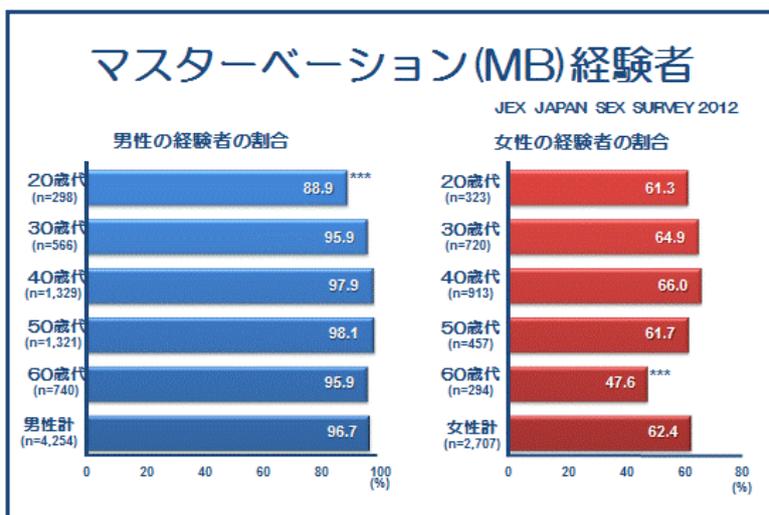
## 2. 満たされない性

マスターベーション（MB）を『満たされない性』と題して取り上げてみることにします。この masturbation という語源は、手《manus》で汚す《sturare》ということだそうです。文字通り《手淫》であり、罪悪視した言葉が当てはめられているのです。確かに 18 世紀の西欧諸国ではキリスト教的道徳による性の抑圧下にあり、マスターベーションは半自然の罪として教会でも懺悔の項目にあり、贖罪に数週間を要したと云われていました。フランスのテイソーは「精液の消費は有害であり、生殖という建設的な目的のみに用いられるもので体力低下、性的不能、思考能力低下など脳への悪影響をもたらすと指摘し、masturbation と称することを提唱した」と、友吉唯夫医師は述べております。

人間発達学の中で幼少期に性器愛が芽生えて無意識のうちに MB に準じる行動を取ると云われています。女兒に多いと云われていますが、この頃に培った性器愛が後の思春期頃の二次性徴の心の発達に影響をもたらすとして重要な役割を演じているのです。

大川玲子医師は「マスターベーション（MB）との関わり方は男女に大きな相違があり、男性は性交以前に体験することが多く、性交相手のいないときや、性交の補充としての意味が大きい。女性は自然に覚える場合と性交とともに体験する場合がある。また性欲の放出ばかりでなく、性交での不満の解消にすることも多い」と『セクソロジー総論』で述べています。

### 2-1. MB を行ったことがあるのは、男 95%、女 60%強

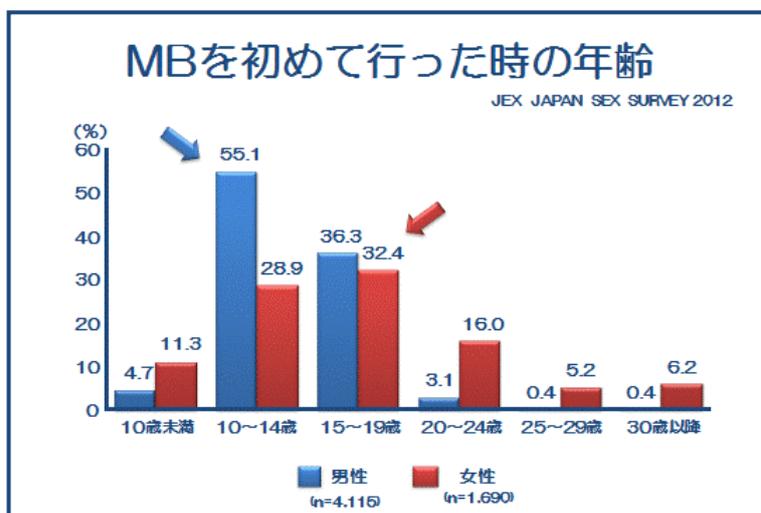


験していました。

ジェクスセックス調査によりますと男性は 4,254 名中 4,115 名（96.7%）が経験していたのです。20 歳代は 90%を下回っていましたが、それ以降は 95%を超えていました。

女性は 2,707 名中 1,690 名（62.4%）と男性より低く 60 歳代の 47.6%を除き、他の年代は 60%以上が経験していました。

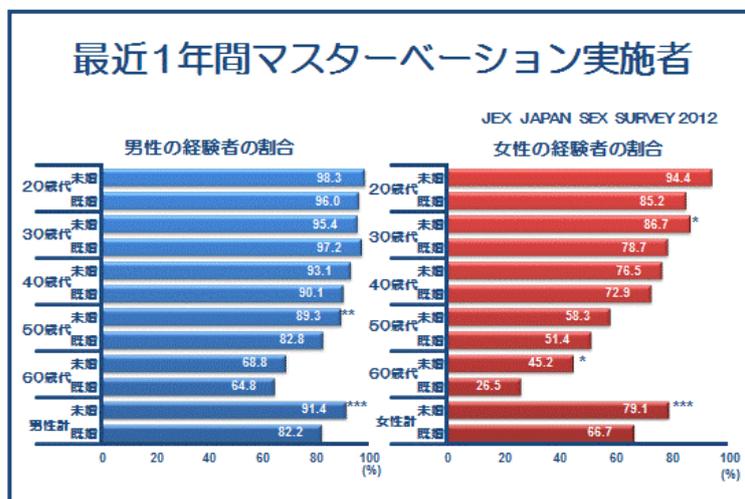
## 2-2. MB の開始時期は男性、思春期前期、女性思春期後期



MB を始めた時期は男性 10~14 歳の思春期前期が最も多く 55.1%、女性は 15~19 歳が 32.4%と多く、次に 10~14 歳 28.9%と続いていました。女性の場合は性器への愛撫ということですから、10 歳未満の幼少期を挙げています。女性も 1 割程度にみられています。

男性と女性とでは必然的に生殖器の持つ意味合いが異なり MB の捉え方も違ってきますが、性への目覚めは幼児期に発来しているようにも思われます。

## 2-3. 最近 1 年間で MB 実施の有無

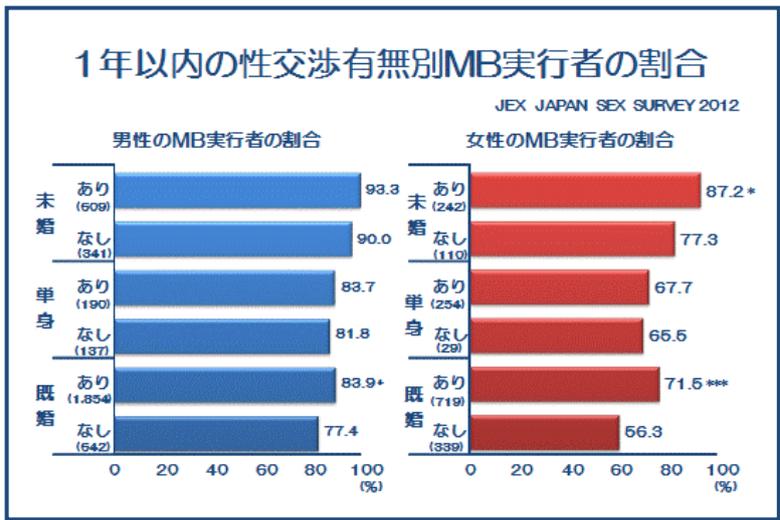


最近 1 年間でみますと、MB 実施者は既婚男性 2,501 名中 2,057 名 (82.2%)、未婚 1,614 名中 1,475 名 (91.4%) と未婚に多く有意差を認めました。女性も同様に既婚女性 1,062 名中 708 名 (66.7%)、未婚 628 名中 497 名 (79.1%) と同様に未婚が有意に高値でし

た。

各年代毎で未既婚を比べてみますと、男性は 50 歳代から既婚者の MB 実施率が顕著に低値となっていました。性欲能の低下が窺えます。

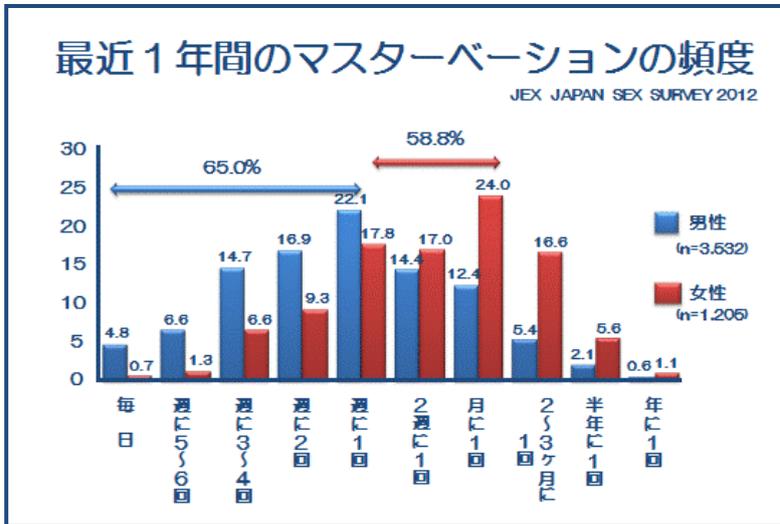
女性では 30 歳代で未既婚での乖離がみられ既婚者が全体的に低値となっていました。この数値からみますと女性は既婚者において 40 歳頃から性への関心が薄れ、50 歳以降からは喪失へと進んでいるように窺われました。



そのMBの実施率を最近1年間に性交渉があったものとなかったもので比べてみますと、男性では既婚においてのみ性交渉有りが有意に高値でしたが、女性では既婚、未婚共に性交渉があった方がMB実施率は高値を示していました。

この事は、大川医師が述べていましたように『性交の補充』的な意味合いがあったように思われます。性行為がなければ性への関心が失われ、喪失感への坂道を急速に下って行くようにも思われま

#### 2-4. マスターベーションの頻度

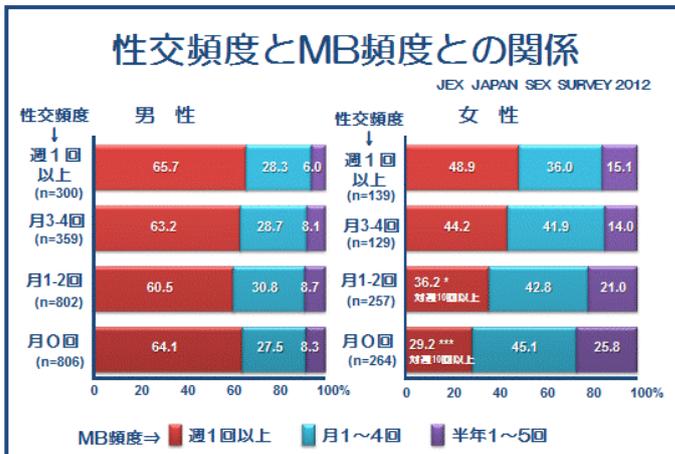


MBが実際にどの程度の間隔で行われているのかについて検討してみました。

男性は週に1回が最も多く22.1%、次に週2回16.9%、週に3~4回14.7%と続いていました。週に1回以上を合わせると65.0%にもなっております。最近MBを行った男性は月に1回以上が9割を超えている事実には驚きとしか言いようがないです。

一方、女性は月1回が最も多く24.0%、次に週1回17.8%、2週に1回17.0%となっていました。女性は月に1回以上では8割弱となっています。男性に比べ間隔は多少あいているようですが、最近MBを行った女性でも8割近くは行っているという事実も驚きです。

## 2-5. 性交頻度とMB頻度との関係

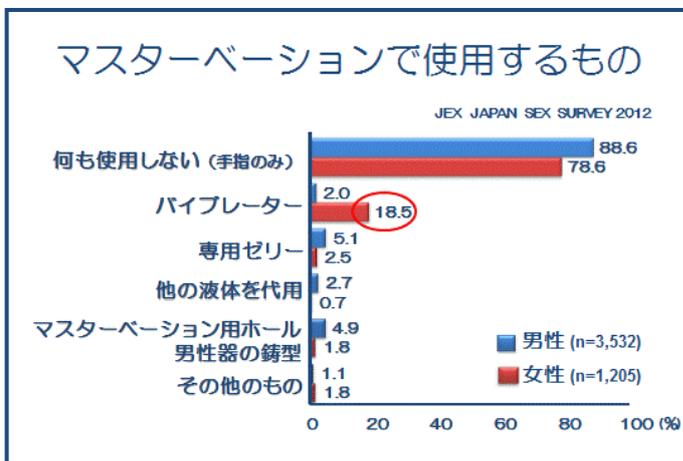


最近1カ月の性交頻度とMB頻度の関係性について検討してみました。

男性は性交の頻度とは関係なくMBが9割強で行われている事実が現れてきました。これは精巣に精子が溢れだしてきたらMBで射出するという生理現象の表れではないかと考えられます。

一方、女性は性交頻度が低下することによりMBに頻度も低下していることが明らかにされてきました。女性はセックスをすることにより性的関心度は高まり、性欲の補充としてMBが行われているのではないかと推察されます。

## 2-6. MBの際にバイブを使用するの？



MBを行う際に何か道具を使用するか？との問いかけに、何も使用しないが男性88.6%、女性78.6%と高値を示していました。まさに、MBは手淫とは言い当てたものだと思います。

ここで注目になるのは、女性のバイブレーターの使用が20%弱であったことです。この数値から逆算するとバイブの市場はかなりのものが見込まれるところです。

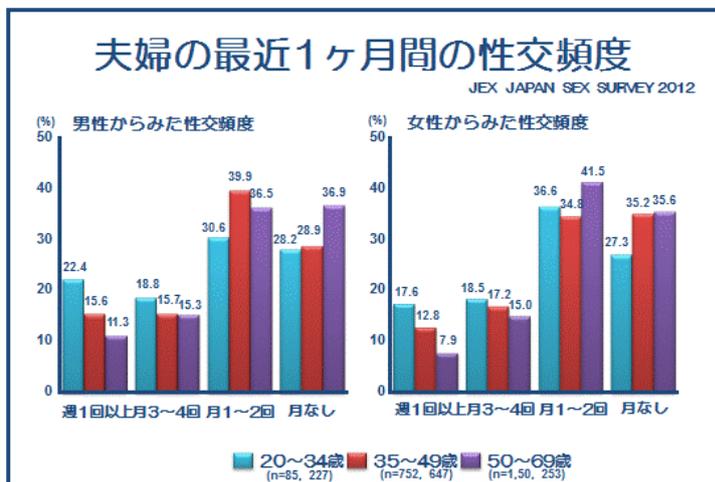
場はかなりのものが見込まれるところです。

## 第Ⅳ章．豊かな性を求めて

### 1. セックスレス

今日の日本社会はセックスレスの時代とまで云われてきているようです。このセックスレスというのは、夫婦間で1月に一度も性の営みを持たなかった場合を『セックスレス』と日本性科学学会では定義しております。この実態を今回のジェクスセックス調査からみて行きたいと思います。

#### 1-1. セックスレスの実態



既婚者における最近1ヶ月間のセックスの頻度を調べておりますが、月3回以上の頻度は年齢とともに確実に減少しております。しかし、月1～2回程度のルーティンセックスの頻度は男女とも35歳以上になりますと年齢にはあまり関係なく35%程度にみられるようです。

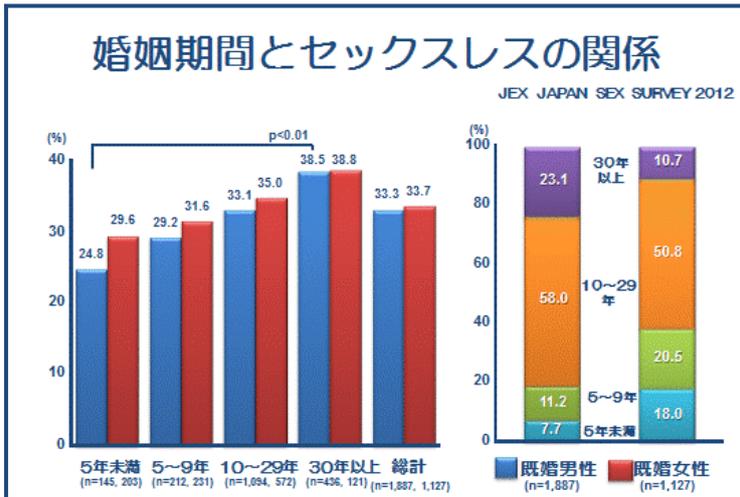
月1度もないセックスレスは20～35歳男女でも3割程度で、女性の35歳以上になって35%を超えてきているという結果が示されています。

このセックスレスは年齢により増えているということは、ルーティンセックスに留まるか、それからセックスレスに移行するという図式が窺えるようです。

#### 1-2. 婚姻期間と関係があるのか？

婚姻期間との関係性について検討してみました。5年未満でセックスレスは男性で24.8%、女性29.6%にも認められました。期間が長くなるにつれ次第に増えている様子がグラフ上でもよく解ります。30年以上にもなりますと5組に4組はセックスレスになっていたのです。

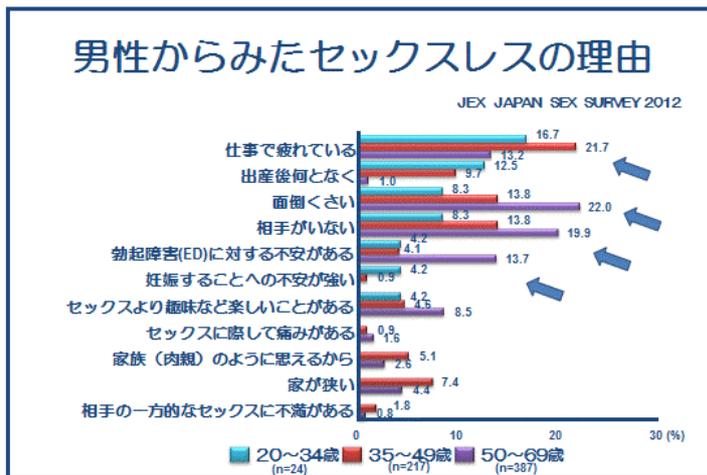
30年以上ともなりますと平均年齢が男性で61.9±4.4（49～69）歳、女性60.9±4.8（46～69）歳でした。年齢からみても肯けるところです。でも裏を返せば、60



歳を過ぎても5組に1組はセックスを行っているということがいえます。60歳以上で月1回以上の性の営みを持っていたのが既婚男性で351名中214名(61.0%)、既婚女性では65名中37名(56.9%)でした。70歳以上のデータは含まれていませんが、高

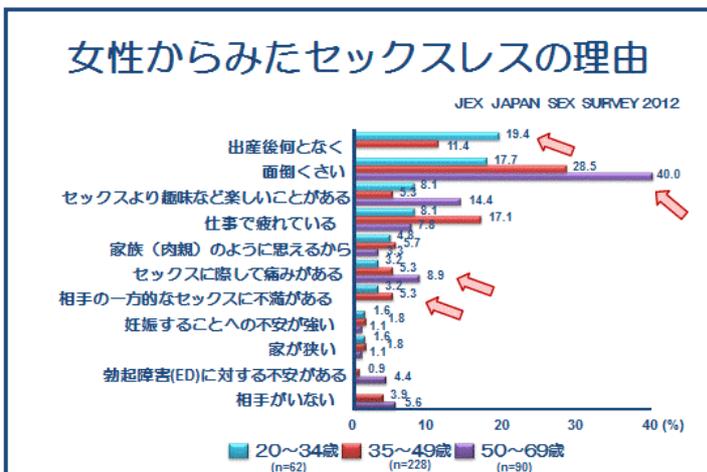
齢であっても性の営みは大変重要な要素が秘められているのです(高齢者の性:参照)。

### 1-3. セックスレスの理由



その理由を男性からみてみますと、『仕事で疲れている』が20～34歳代16.7%、35～49歳代で21.7%でした。50歳以上では『面倒くさい』22.0%、『相手がいない』19.9%、『EDに対する不安がある』13.7%と続いていました。

この相手がいないは、妻が相手にしてくれないという見方が良いのかもしれません。また、EDに対する不安も年齢により増えている様子がうかがわれます。



女性からの理由をみますと『出産後なんとなく』が20～34歳代で19.4%と多く見られました。女性の最も多い理由として『面倒くさい』で35～

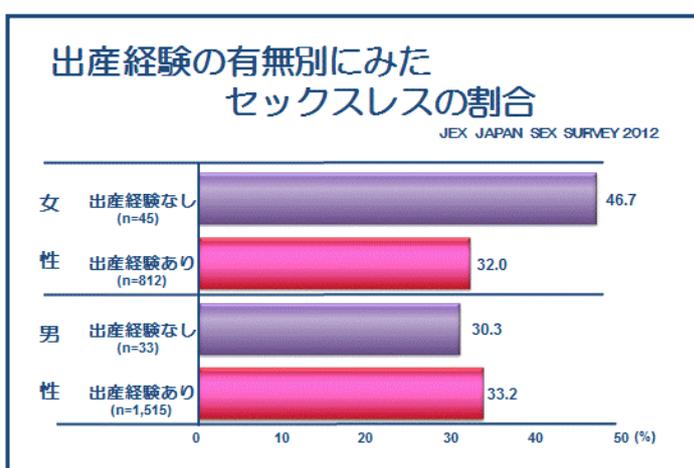
49歳で28.5%、50歳以上で40.0%となっています。

この『面倒だ』は、35～49歳では子育てに追われ、50歳を過ぎると夫との関わりを意味しているのではないかと考えられます。

『セックスに際して痛みがある』や『相手の一方的なセックスに不満がある』は夫、男性側の要因でセックスレスになっていることです。

セックスレスの要因として、男性は仕事のかかわりから、加齢ということも相俟って妻とのかかわりを煩わしくなっているようで、女性はお産後の子育て、と年齢が加わって夫への煩わしい思いが重なってきているように窺われ、それを増長しているのが『夫の一方的なセックス』ではないかと考えられました。

#### 1-4. お産のあとがセックスレスの理由になっている？



『出産後なんとなく』が男女共にセックスレスの理由として挙げられていましたが、実際に指摘できるのか否かを検証してみました。ジェクス調査には子どもの数を問いかけていませんので、出産経験の有無で調べてみました。

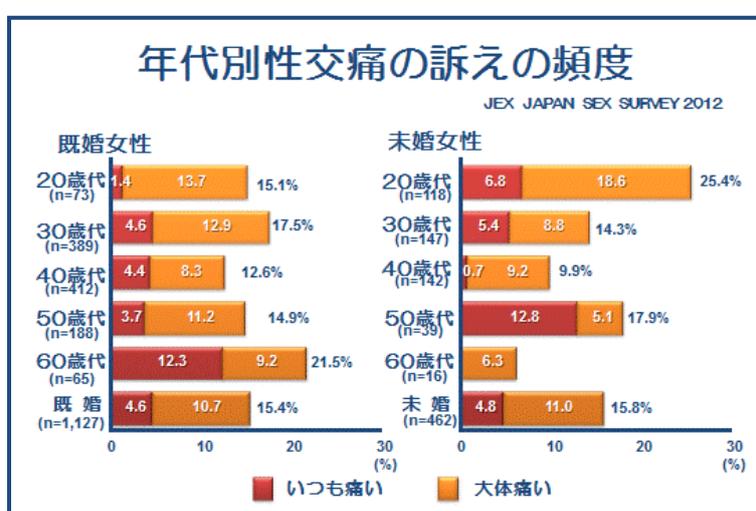
出産経験のない既婚女性でのセックスレスは46.7%、出産経験のある女性は32.0%と後者がむしろ低くなっています。男性の妻の出産経験の有無でも殆ど同じでした。

出産が直接的な誘因となっているのではなく、お産が契機となって子育てや夫の一方的なセックス等と云った他の理由が重なって煩わしく思うに至ってきたのではないかと考えられます。男性の理由に『相手がない』がそのことを意味しているのではないのでしょうか？

## 2. 性交痛の悩みは女性にとって深刻

性の営みにおいて、痛みを伴うようではせっかくの喜びも半減してしまいます。歯を喰いしばって我慢しろというのはお門違いも甚だしいものです。一方的なセックスであってはならないもので、お互いが喜びを分かち合う『快樂の性』でなければなりません。

### 2-1. 性交痛をどれくらいの女性が訴えている？



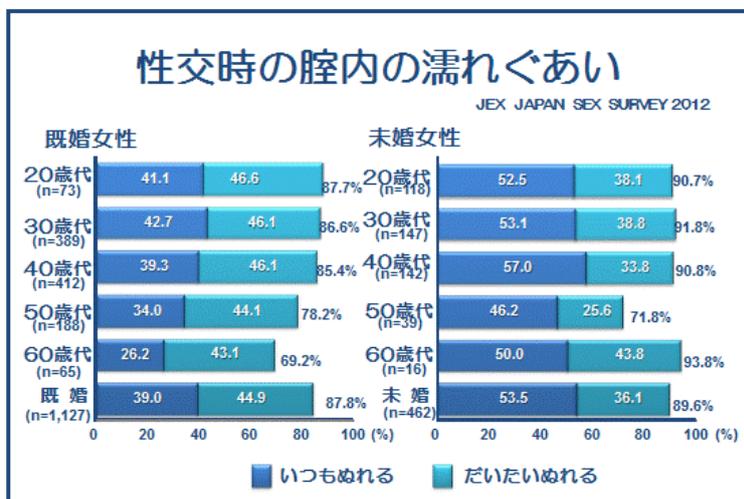
性交痛は一般的に女性が訴えるものです。ひどい痛みやいつも痛いような場合は、子宮内膜症等と云った器質的な疾患がまず疑われます。産婦人科などの専門医に相談しなければなりません。

ここではジェクス調査から性交痛についてみます。

未既婚に分けてみまし

た。未既婚とも性交痛の程度と頻度は殆ど同じです。既婚女性では年代にあまり関係なく20%前後で訴えています。これは年齢とともにセックスの頻度からルーティンセックスが増えていると指摘していましたが、マンネリなセックスが影響しているのかもしれない。でも未婚女性は訴える頻度が50歳を除いて年齢とともに少なくなっています。50歳に多いのは理由が掴めませんが母数が少ないためと考えます。結婚には至っていないための愛情をお互い確かめ合うものだと考え、大切な性の営みだから少ないといえるのではないのでしょうか。

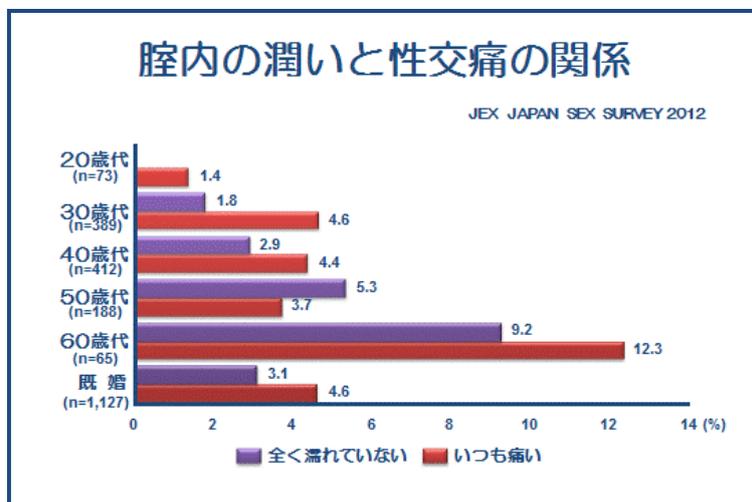
## 2-2. セックスに膣の潤いは不可欠



セックスをする際には女性の膣内は十分に潤っていないと十分な挿入ができません。そうでなければペニスを受け入れることができないのです。濡れていないところへ無理するととても痛くて挿入できないのです。

性交時の膣の濡れぐあいについてみますと、『だいたい濡れている』と答えたのが

既婚女性 87.8%、未婚女性 89.6%とほぼ同じ割合で潤っているようです。そうでなければセックスは到底できないのです。でも、いつも濡れてから行っているのは、既婚女性は 39.0%に対し未婚女性は 53.5%と 14.5 ポイントの開きがあり未既婚間に有意差を認めているのです。既婚者においては十分に潤わない状態で及んでいることが窺われます。

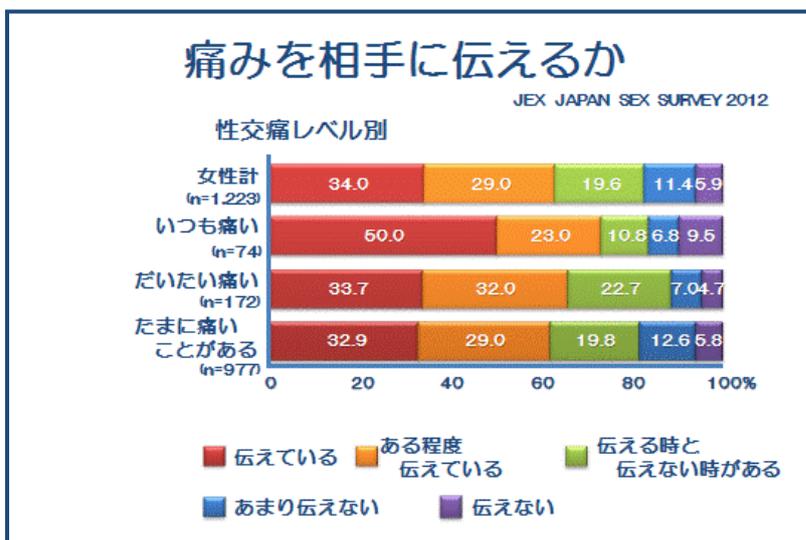


膣内が全く濡れていないと答えた女性と性交痛の関係をみてみますと、非常によく相関していると指摘できます。また、加齢とともに潤いがなくなり、性交痛も増えるという図式も同様です。

このようにしてセックスの際には膣内が十分に潤っていることが不可欠なのです。それをおざなりにすると

性交痛を訴えて、楽しいはずのセックスがつまらない、夫への義務的なものになりセックスレスへ移行していくのです。

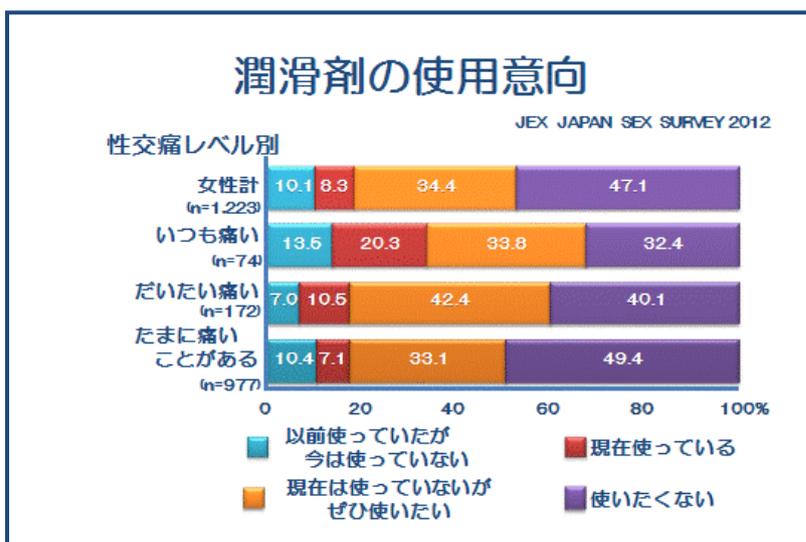
## 2-3. セックスの痛みを相手に伝えているのか？



未既婚を含めた1,223名の女性に問いかけますとある程度を含め63.0%は伝えています。いつも痛い女性は73.0%と高くなっています。伝えない女性も1割はおり、この場合、我慢のセックスと云えます。

でも概ね伝えていることが示されています。

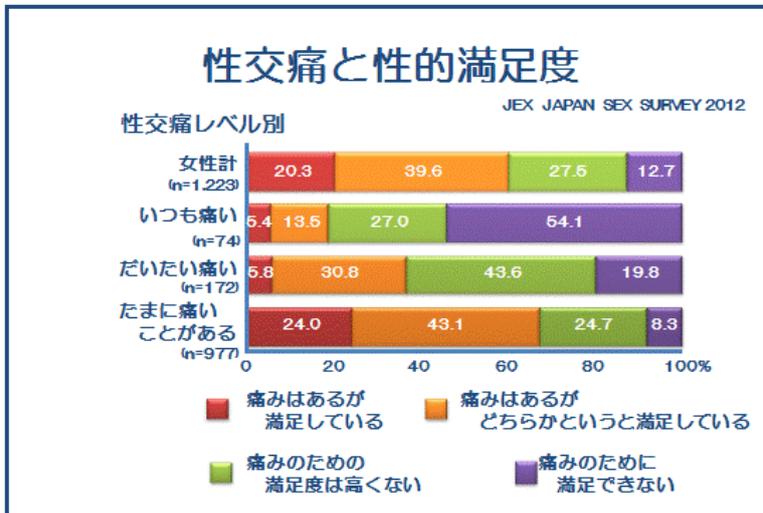
ジェクスは、性交痛で悩む女性の為に『リユーブジェリー』という腔潤滑剤を販売していますが、その使用意向について問いかけています。それをみますと約半数の女性は使いたくないと答えています。やはり腔内になにかを挿入することに抵抗感があるようです。



でも「いつも痛い」と訴える女性は32.4%と少なくなって、現在使用している20.3%、是非使いたいが33.8%とあり、痛みから解放されたいという願いが伝わってきます。

いつも痛い女性で、以前使っていたが今は使っていないが13.5%もあったことです。パートナーの男性は女性の訴える性交痛を知っているのでしょうか？男性の一方的なセックスになっていないか問いかけてみたくになります。

## 2-4. 性の営みは性交痛から解放されて豊かなものになる



性交痛と性的満足度についてみますと『痛みの為に満足できない』12.7%、『痛みの為に満足度は高くない』27.5%、計40.2%が痛みの為に満足できないと回答しています。痛みは女性にとって性の喜びを失わせるものです。

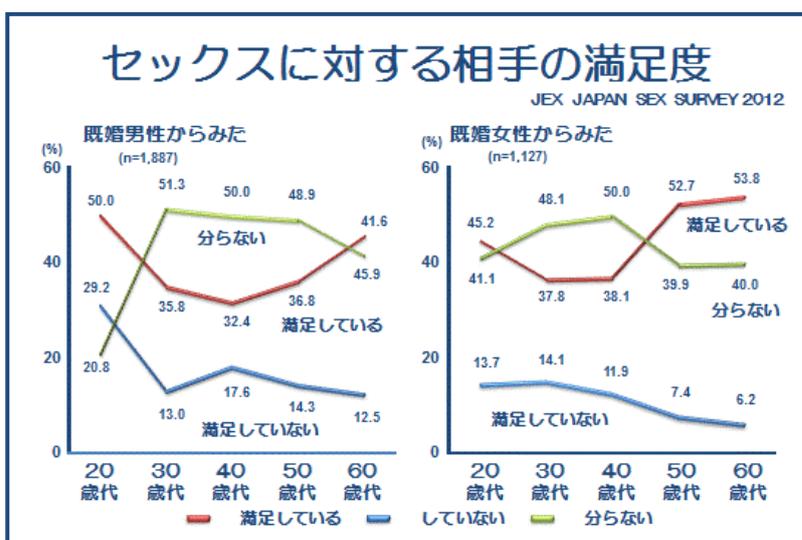
いつも痛いと訴える女

性の半数以上が満足していないのです。性の営みは男と女が交わって行うものですから、男性は女性の喜びを確かめながら奏でる性の調べとなるものでなければなりません。

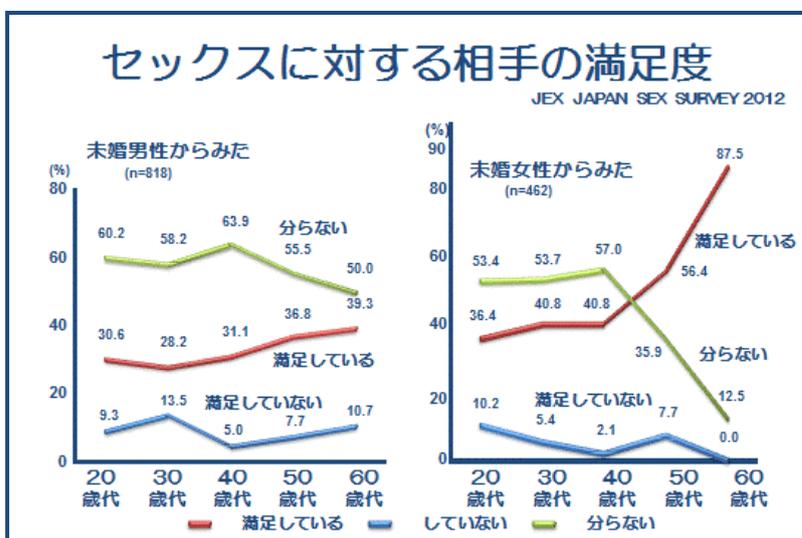
### 3. 豊かな性を求めて

パートナーは、あなたのセックスに満足しているのか否かは、とても気になるものです。満足しているのであれば豊かで実りある性の営みといえるでしょう。

#### 3-1. パートナーの性的満足度の自己評価



パートナーの性的満足度として、既婚者では男女共に20歳代は満足していると評価し30～40歳代に減少し、高齢になるにつれ再び上昇しているのが示されています。満足していないと思っているのは低く、年齢とともに減少しています。

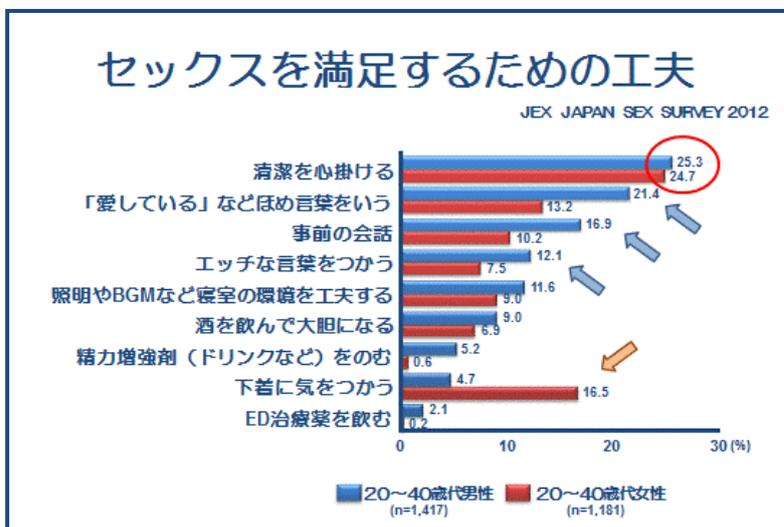


未婚者においてはわからないが多いのですが、満足していると考えるのが年齢とともに上昇しています。否定者は既婚者よりもさらに低値を年齢に応じて推移していますが、未婚であるがゆえにそのセックスに情熱をかけているからではないかと考えます。わからない

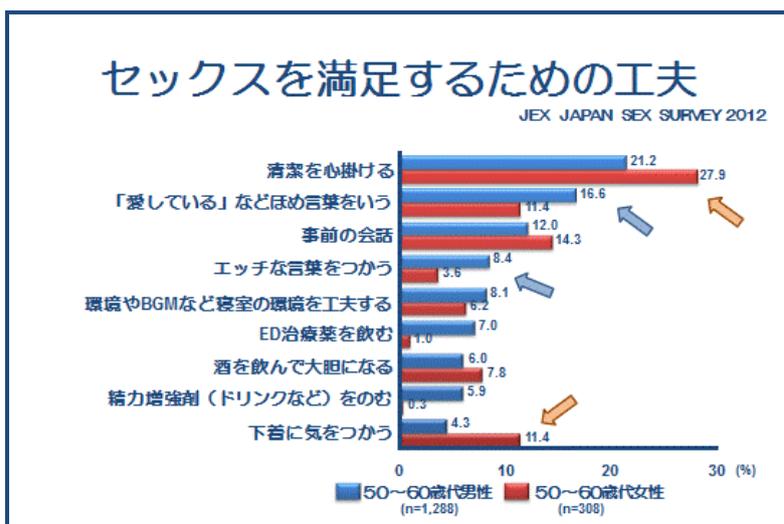
いと判定を保留するのも多いのではないのでしょうか。

50歳以上の女性になると満足していると判断しているのが未既婚ともに上昇しているのは、受け入れる性という考えが強くなり込んでいるのではないのでしょうか。

### 3-2. 満足いくセックスにするための工夫



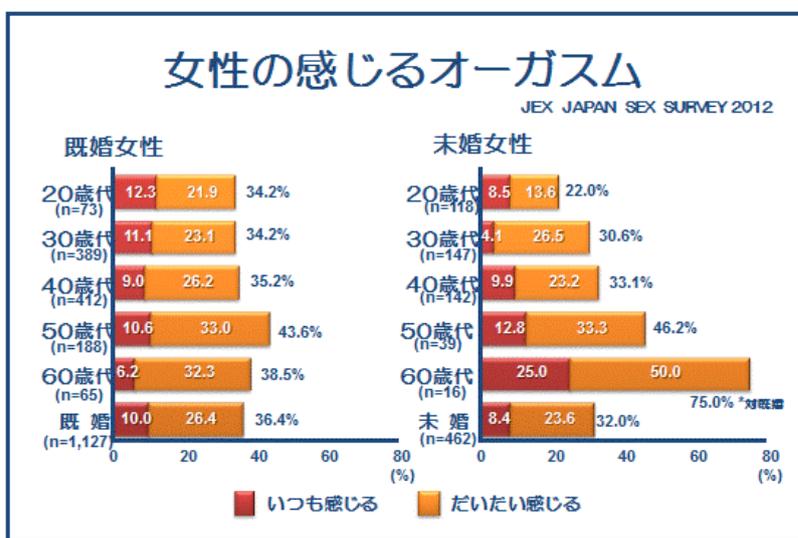
セックスを満足するための工夫として、男女とも『清潔を心掛ける』が25.3%と24.7%でした。次に多いのが『愛しているなどの褒め言葉を云う』男性に21.4%と高値でした。事前の会話が続いていましたが、この会話は、お互いのコミュニケーションを図るうえにおいてとても重要なことです。そして女性は下着に気を使うが挙げられており、女性ならではの考えです。



20~49歳までの工夫でしたが、50歳を越えたグループでみると男性はED治療薬や精力増強剤の手を借りる考えがあげられております。女性

性はより清潔を心掛け事前の会話を重視するようになってきています。高齢者の性には、潤いを促すためにも性的会話はとても大切なことと云えましょう。

#### 4. 3～4割の女性がオーガズムを感じている



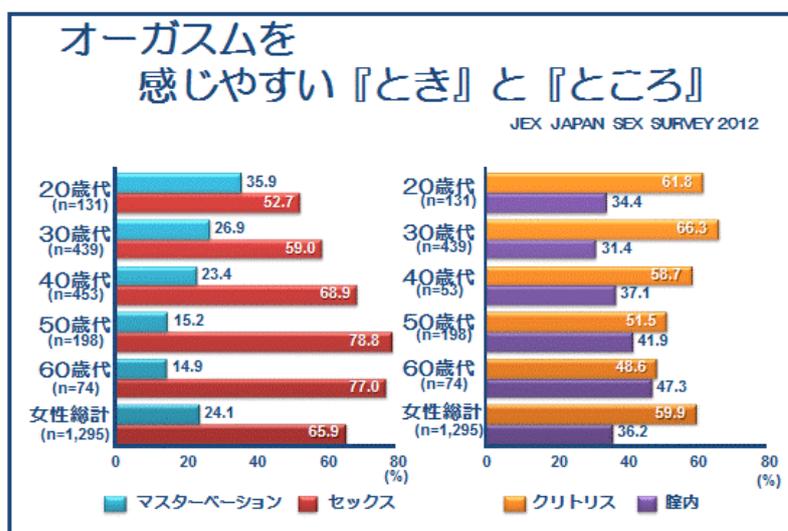
オーガズムを感じている女性は3割強と示されています。既婚と未婚を分けてみますと、既婚女性は年代間格差は殆どみられていません。年代を重ねるにつれ『いつも感じる』女性が減ってきています。逆に、未婚女性においては増えていることが示されています。しかも『いつも

感じる』も上昇しています。

この違いは、生活を共にする既婚者の夫婦生活は、マンネリ化した『ルーティンセックス』と生活を共にしない未婚者のセックスの違いが、その時の情熱の表れによるものといえるのではないのでしょうか。

女性のオーガズムは男性の射精現象に伴うものと異なった多様性があります。その時のパッションによる影響が大きいと云えます。

#### 4-1. 女性のオーガズムは年齢に応じ、『とき』と『ところ』をかえている



オーガズムを感じやすいのは、マスターベーション (MB) のときか、セックスのときかを聞いています。

MBの時と答えているのは、若い世代に多く次第に減っているのが示されています。セックスでのオーガズムは年齢とともに増えていま

す。

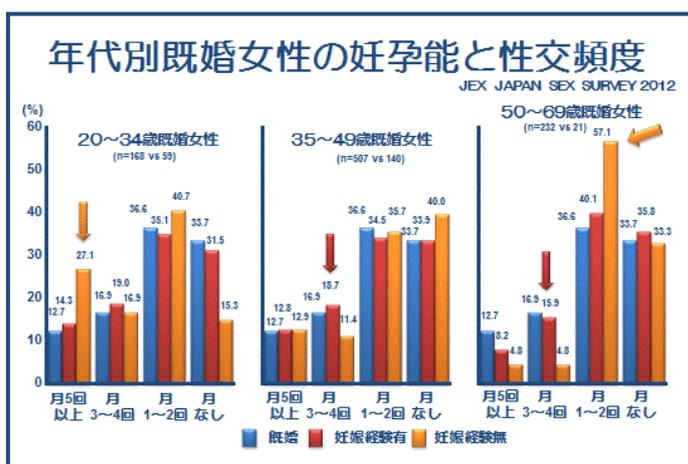
最もオーガズムが得やすいところを『クリトリス』と『膣内』の二つでみます。『クリトリス派』は年齢とともに減少し、逆に、『ヴァギナ（膣）派』が上昇しています。女性にとっての快感は、最初にMBのクリトリスで得られたものから、セックスによって得られた快感が勝ってきていることが秘められているのです。男女共に営まれるセックスはお互いの喜びをとおして多くなり、お互いの心の絆が強くなって行っている証しではないでしょうか！夫婦和合の性はお互いの人生を豊かにするものと云えます。

#### 4-2. 豊かな性の営みは実り多きもの（生殖の性）

少子高齢社会は深刻な問題となってきておりますが、背景には晩婚社会が関わってきています。子育て支援などを中心とした様々な対策が講じられております。一方、40歳以上の出産も過去10年間で7倍増がみられるなか、妊娠適齢期を過ぎ不妊で悩む女性には高度生殖医療の貢献も見逃すことはできません。

妊娠し子どもを育むという願いには、セックスの回数が極めて重要なことは云うまでもありません。しかも月に1回しか排卵しないのが常です。排卵された卵子は24時間ほどで受精する能力が失われてしまいますので、比較的頻回のセックスで精子を受け入れておかなければなりません。射出された精子は女性の子宮頸管内に取り込まれて初めて受精する能力が付きます。しかも女性の生殖器内で4～6日間ほど元気でいます。

それだけに月1～2回ほどのセックスでは、妊娠するにはなかなか難しいといえるのです。少なくとも月に3回以上の性の営みが望まれます。



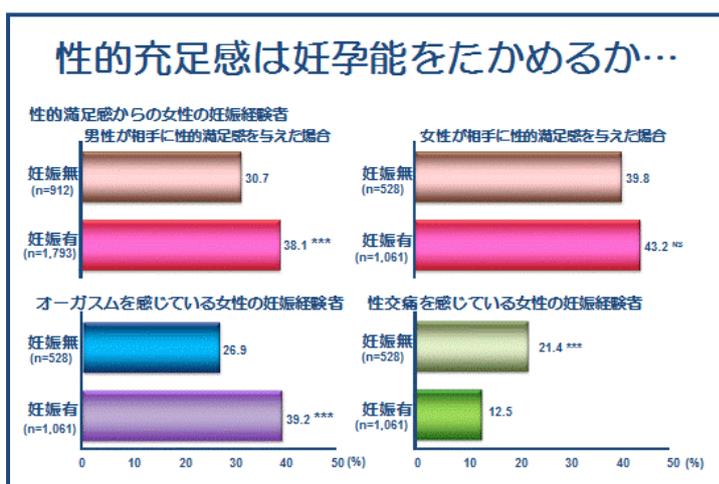
そこで夫婦の性生活の頻度を週1回以上の『妊娠好期状態』、月3回以上を『妊娠可能状態』、月1～2回を夫婦としての回数『ルーティンセックス』、そして月に1回もないのを『セックスレス』と4群に第Ⅲ章で分けて述べました。その頻度を20～34歳の活動期、35～49歳の成熟期、50～69歳の円熟期

と4群に分け、その性交頻度と妊娠経験の有無別に振り返って検討してみました。

20～34歳の活動期では未だ妊娠を経験していない群において週1回以上が27.1%と高値を示していました。子どもを望んで営まれていました。35～49歳の成熟期では妊娠経験群につき3回以上が18.7%と非経験群に比べ6.9ポイント高値でした。50～69歳の円熟期では妊娠経験群が月3回以上に11.1ポイントの差を持って高く、非経験群では月1～2回が57.1%と17ポイントの差を持って高値を示していました。

妊孕能の最も高い活動期では非妊娠群において週1回以上が高く、成熟期に入ると妊娠経験群とほぼ同じ割合での頻度となり、50歳を過ぎて行くと妊娠できない群では、お決まりの『ルーティンセックス』組に入ると行くような様相が示されています。セックスそのものへの消失感が芽生えて行くような意識が窺われます。

#### 4-3. オーガズムを感じた多くは妊娠を…！



同じようにして妊娠を経験した既婚女性と経験していない女性とに分けて『性的充足感』について振り返って検討してみました。

まず、「あなたのセックスにパートナーは満足していますか？」という問いに対し、男性からみた妻の性的充足度得御みますと妻が妊娠を経験していた

群では満足していたのが38.1%と多く、非妊娠群の30.7%に対して有意差を認めました。逆に、女性からみた夫の性的充足度は両者間に有意差は認められていません。すなわち性的充足度を得ている群に妊娠していた女性が多かったのです。

オーガズムを感じている女性では非妊娠群に比べ妊娠経験者が39.2%と12.3ポイントも多く有意差を認めていました。性交痛をいつも訴えているなかでは妊娠を経験していた女性が12.5%と非妊娠女性の21.4%に比べ8.9ポイントも低く有意差を認めております。

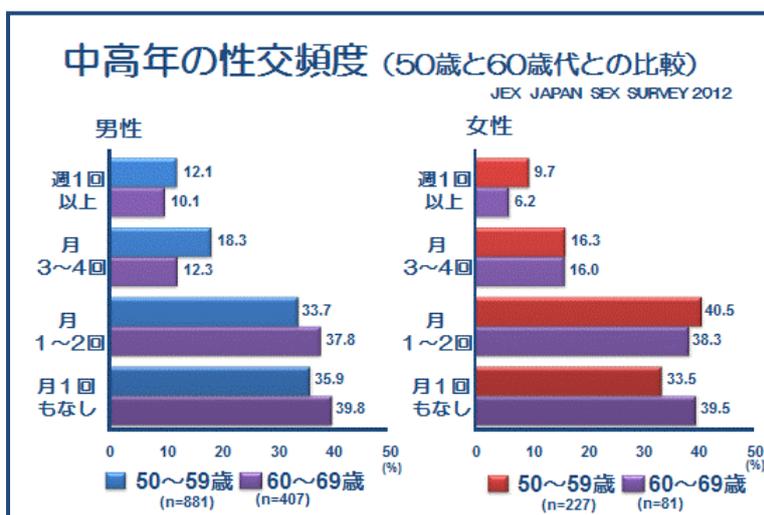
このように性的充足度を得ている女性は、妊娠していることが多くなっていたのです。満足のいくセックスによりオーガズムを得ている女性は妊娠しやすい、『妊孕能』

が高くなっているのです。おそらく骨盤腔の血流が亢進しているからではないでしょうか。

## 5. 高齢者の営む性

60歳以上の高齢者の未既婚含めた男性407名からの回答によりますと245名(60.2%)が月1回以上の性交渉を持っていました。女性は81名中49名(60.5%)でした。60歳を越えても性は健全なこととして行われているのです。

### 5-1. 高齢者の性交頻度



本調査の対象は20歳から69歳となっていますので、50歳代と60歳代とに分けて高齢者の性を、未既婚を分けず一括して検討してみました。

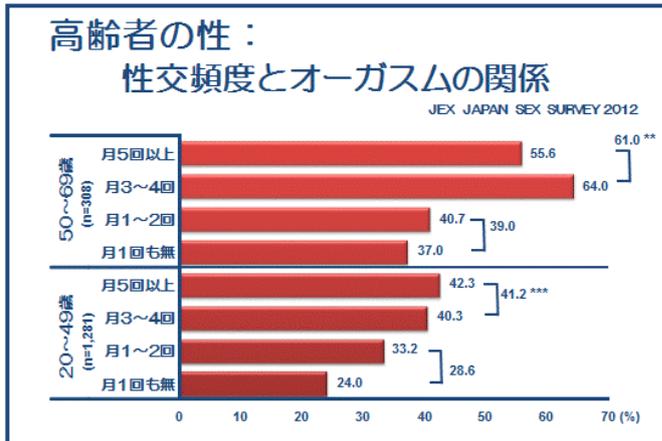
性交頻度の回答の得られた50歳代男性881名、女性227名、60歳代男性407名、女性81名での比較です。

これをみますと男性では50歳代と60歳代では殆ど変化はみられていませんが、60歳代に入りますと月3回以上の頻度が少し低下し月1~2回、月一度もなしに移行している様子が窺えますが、それもわずかです。女性においても全く同じことが指摘できます。

これらのことから高齢者の性は、50歳代で性的能力が活かされていれば、殆ど変わることなく60歳になっても維持し続けることは可能だということを物語っていると思われるのです。

## 5-2. 高齢者の性：性交頻度とオーガズムとの関係

50歳を越えてくると男性は男性ホルモンの分泌も低下し性機能が衰え始める頃と云われています。女性も50歳周辺にみられる閉経に象徴されるように卵巣の機能が低下し女性ホルモンの減少が起きます。では、なぜ50歳になっても、60歳になっても性の営みは続けられているのでしょうか？



その謎を解き明かすのが『オーガズム』だったのです。お互いが歓びを分かち合う『快樂の性』にあったのです。

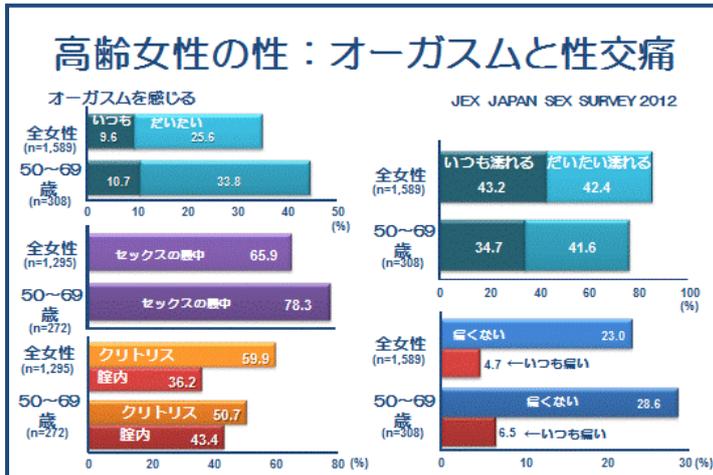
女性からみた「性交頻度」と「オーガズムを感じる」データをクロス集計してみました。50歳以上で月3回以上セックスをされている女性は77名いました。そこでオーガズムを感じている女性が47名

(61.0%)です。月2回以下の女性では231名中90名(39.0%)がオーガズムを感じており、両者間に有意差を認めたのです。この性の歓びがお互いを惹きつけていたのです。

20～49歳までの女性をみても同じことがいえます。セックスの回数が多いほうにオーガズムを感じているのが回数の少ないものに比べ多いのです。でもここに大きな違いがあったのです。確かに50歳を越えての女性の母数が少なくなっていますが、オーガズムを感じている女性は、50歳未満の女性よりもはるかに多くの女性がオーガズムを感じ取っていたのです。

高齢者の性の営みには、単に性を交えるだけではなく、お互いが性の歓びを分かち合い、そこに芽生える心の絆『連帯の性』培われているのではないのでしょうか。

### 5-3. 高齢女性の性：オーガズムと性交痛



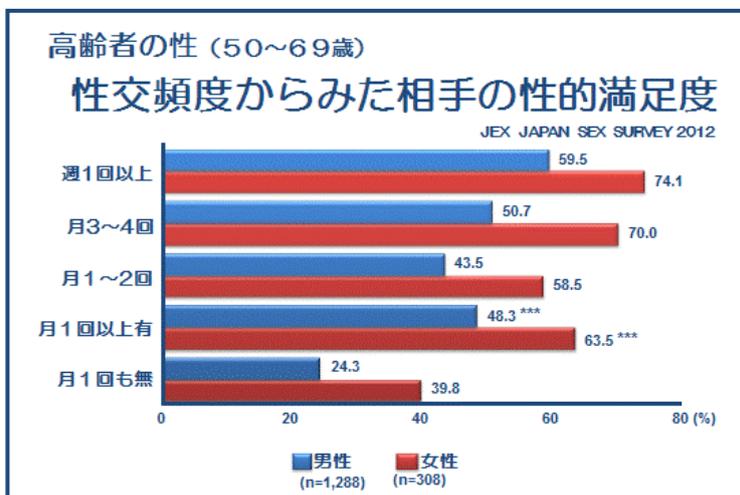
女性は50歳を過ぎると卵巣の機能低下に伴い閉経を迎えます。女性らしさを司る女性ホルモン（エストロゲン）分泌も低下し、必然的に膣萎縮も生じてきます。性交痛も訴えが増えてくると想像しますが、6割の女性はセックスを営んでいます。妊娠からの解放からなのでしょうか？

ジェクスの調査からみまると、オーガズムを感じているのが全女性よりも増えてきているのです。しかもセックスの最中が最も多く感じているようです。クリトリスもさることながら全女性よりも膣内で多くが感じ取っています。

膣内の潤いは、全女性に比べ低くはなっていますが76%が潤っているのです。確かにセックス時にいつも痛いと訴えている女性も6.5%といますが、性交時に痛みはないと答える女性が28.6%と全女性よりも多いのです。

これはパートナーである夫（彼）が献身的に女性を思いながら行っている証しではないのでしょうか？お互いの絆が強く深まっていくのでしょうか。

### 5-4. 高齢者の性：性的満足はお互いに分かち合っている



高齢者の性として、50~69歳までの男女間で営まれているセックスは、お互いに豊かな気持ちを抱かせているのだろうか？

これを性的パートナーの満足度で推し測ってみますと、月一度あるものとないうちでは有意に異なっています。

す。ある群において相手は満足しているという充足感を抱いているのです。頻度の多いほうに高く、しかも女性に高値となっています。高齢者の性、妻は夫に性的充足感をもたらし、夫を励ましているのです。

女性は「生殖年齢の周辺」を境にして様々な弊害をもたらします。それは不定愁訴という日常生活を脅かす更年期障害としての表れです。それを乗り越えて豊かな人生を夫とともに歩んでいくために『性生活』は、とても大切なことなのです。

これらのことはジェクスのジャパン・セックス調査が物語っていたのです。この調査結果を読み解きながら、お互いの性のあり方を今一度考えてみませんか？